Boy Meets Girl

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｂｏｙ Ｍｅｅｔｓ Ｇｉｒｌ

【Ｎコード】

Ｎ６８３７Ａ

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

アメリカから転校してきた主人公愛川翔太（アイカワショウタ）が、天上天下小学校を舞台に繰り広げる勢いだけ学園コメディー。マニアックなネタ・意味不明なネタ・顔文字を使ったネタ等、楽しめるトコロは盛り沢山です（＾＾）ｖ

1時間目【転校生】

僕の名前は、愛川翔太(アイカワショウタ)。
年齢は１１歳。小学５年生。僕は、アメリカからここ日本にやってきた。
所謂、帰国子女ってヤツだ。

「今日から皆のお友達になる、愛川翔太君です。皆、仲良くするように」
担任の、松下結香(マツシタユカ)先生が言った。

「よろしく～＼（＾Ｏ＾）／」
「目が青い！」
「ハーワーユー？」
クラスメイトが、翔太に声をかける。

「…ハロー」
ヤバいよ！僕アメリカに住んでたけど、日本人が通うスクールに行ってたから、全く英語が喋れないんだ。でも、そんな事皆は知らないし…どうしよう…。

「ジャア愛川クン。ソコノ席ニ座ッテ下サイ」
松下先生は、片言な日本語でそう言った。
「少しなら、日本語わかります」
よし！これで、少しは日本語が通じるって事が、皆にわかったゾ（＾＾）ｖ
翔太は、心の中でガッツポーズをした。
そして翔太は、ちょうど教室の真ん中にある、自分の席へと歩く。

「はじめまして、愛川君。ヨロシクね（＾－＾）」
僕の席の隣に座っている女子が、声をかけてきた。
「よろしく」
僕は、自分の席に座りながら、隣を見た。
するとそこには…
幼なじみの、雫（シズク）がいた。

《Ｃｈｅｃｋ！》
翔太と雫は、幼なじみ。
なので、雫は翔太が英語を話せない事を知っている。
「…ワット（？＿？）」
すると翔太は、少ししか日本語が話せない作戦を開始した。
ここでバレちゃいけない！皆を騙した事になる！
そう、心に誓う翔太だった。

「オーマイガッ（＜＿＞）」
今からでも、僕は英語が話せない！って皆に言おうかな？でも、皆英語の辞書持ってるし…先生なんて、任天〇ＤＳ持ってるし…。

「ホントにどうしよう…」
こうして、日本生まれアメリカ育ちの、愛川翔太の転校初日がスタートした。

2時間目【給食】

〈キーンコーンカーンコーン♪〉

やっとお昼だ！ランチだ！と、お腹を押さえながら思う翔太は、お腹がペコペコだった。

「セーフ（ー＿ー）」

今日は、英語の授業が無いのでラッキーだ（^^）v

でも、明日英語あるし…どうしよう。

すると先生が、

「今日は、一班が給食当番です。速やかに、行動しましょう（^O^）／」

と言った。

「…？？」

僕は、先生の言ってる意味が分からなかった。

アメリカの学校では、昼食は食堂に行ったり、お弁当を食べていたから。

ランチは、日本では給食って言うのかな（・・？）

「給食は、生徒の健康を考えて作られている、食事の事だよ」

雫が、小声で言った。

「あ、ありがとう」

翔太も、小声で言った。

「シズク～。早く机を動かして～」

と言うのは、翔太と雫と同じ班の、オタコンこと里村梓（サトムラアズサ）。

「愛川くんの机は、僕がやるからね（^＿^）」

と言うのは、殿様こと徳川祐介（トクガワユウスケ）。

四つの机はくっつけられ、遠くから見たら一つの机に見える。
「ワオ！（。＿。）」
僕は、机をくっつけて皆で食べるという事に驚いた。
「立ってないで、座ろうよ（＊＾＿＾＊）：梓」
「今日の給食は、何だろう？：祐介」
「昨日は、野菜ばっかりだったな～：雫」

「ソーリー（・・；）」
そして、席につく。

ー数分後ー
「いただきまーす（＾Ｏ＾）」
今日のメニューは、
・コッペパン
・フランスパン
・食パン
・メロンパン
・フライパン

「コレが、僕達の健康を考えて作られた食事なの？」
翔太は、小声で問う。
「いい加減な、管理栄養士なんだ～」
雫が、小声で答える。

3時間目【終わりの会】

時計の針は、ジャスト3時を指していた。
今から、終わりの会が始まるようだ。

「翔太君。今から、終わりの会が始まるからね」
雫は、小声で話す。
「終わりの会って何？」
翔太も、小声で話す。
「終わりの会っていうのは、ホームルームみたいなモノかな～（＊＾―＾＊）」
「そうなんだ！」

少しして、チャイムが鳴った。すると、急いで教室へと走る男の子の姿が、ちらほら見えた。
「廊下は走っちゃいけないよ：雫」
「車は急に止まれないしね：翔太」

そして漸く、担任の松下先生が登場。
「みんな～。今日は、何でお掃除しなかったか分かる（・・？）」
唐突にそう言う松下先生は、優しく微笑んでいた。
「そうだよね！皆正解！」
誰も何も答えていないのに、勝手に話を進めている。
「愛川君の、歓迎パーティーをする為だよね（＾＾）」

「（。―。）」
マジで！僕、嬉しいよ！

すると、皆は、

「これから仲良くしようね～（＾Ｏ＾）／」
「分からない事があったら、何でも聞いてね☆」
僕に優しくしてくれた。

「センキュー（Ｔ｜Ｔ）」
日本人って優しいな～。転校してきて良かった！

「泣くのは、まだ早いんじゃないのかな？」
と、松下先生。
「ティーチャー…」
松下先生ありがとう！僕に、チャンスをくれて。

言わないと！
皆に言わないと！

「僕…実は…英語は全く話せないんです。皆に黙っていて、ごめんなさい…」
どうしよう？黙っていたから、僕の事嫌いに…。

「じゃあ、一緒に勉強しようよ～（＾Ｏ＾）／」
「気にしなくていーよ」
「何で泣くの～？笑おうよ～（＾ー＾）」

「みんな…（Ｔ｜Ｔ）」
涙が止まらないよ。悲しくないのに、止まらないよ。

4時間目【ニックネーム】

昨日はあまり触れなかったけど、何でこのクラスには、全員にニックネームがあるんだ（・・？）

「このプリント、ズバリ言うわよとジミーで、皆に配ってくれない？」

ズバリ言うわよ？
ジミー？

「お菓子は、学校に持ってきちゃイケナイでしょ。壊れかけのｒａｄｉｏとワインレッドの心、分かった？」

壊れかけのｒａｄｉｏ？
ワインレッドの心？

僕はまだ、ニックネームが無い。
ニックネームは正直いらないけど、僕だけ仲間外れは嫌だしね。
「先生！僕にも、ニックネーム付けてよ！」
翔太は、大声で言った。
「そうね～。愛川君も、ニックネーム付けないとね」
松下先生は、腕組みをしてう～んと考える。
「ニックネームを付ける際には、その人の特徴とかを参考にするのよね～。だから、愛川君の事を教えて？好きな食べ物とか嫌いな教科、何でもいいのよ」
「そうだな～」

僕のプロフィール←

名前：愛川翔太
年齢：１１歳（小５）
特技：ゲームを誰よりも早くにクリアする事
秘密：英語が話せない事
尊敬：お父さん
好き：ヒ・ミ・ツ
嫌い：ピーマン、いとこのアイツ、病気

「なるほどね～」
松下先生は、僕をじーっと見た。
そして先生は言った、

「アメリカに住んでいたから、アメリカン（^・^）b」

「…えっ（「□」；）！！」
翔太は、結局ソレかよ！と心の中で叫んだ。「因みに私は、ヒロインだからニックネームはヒロインだよ」
雫は、さり気なく言った。

5時間目【お姉ちゃん】

「ただいま～（≧∇≦）」
と元気の良い声を出すのは、カレーライスが大好きな翔太君。
するとリビングから、
「おかえりなさ～い」
と聞こえた。
「お姉ちゃん？」
翔太は、無邪気にニコリと笑い、ランドセルをその場に置いて走った。

〈バタンッーーー！〉
勢い良く開けられた木製のドアは、壁に当たった。

「お姉ちゃん、昨日は寂しかったよ（；＿；）」
瞳は、ウルウルしている。
「寂しい思いをさして、ゴメンね。昨日は、新製品の会議が長引いちゃって、帰れなかったの」
リビングにいたのは、翔太の姉の涼子（リョウコ）。僅か22歳という若さで、会社の社長なのだ。

「昨日はお兄ちゃんも帰ってこなかったし、僕一人だけで、心細かったんだから（＞＜；）！！」
翔太は、ソファーに座っている涼子のもとへゆっくり歩くと、涼子の隣に座った。
「よしよし。小学生である君を、一人にしてゴメンね。でもね、君は男の子だから、コレぐらいの事で泣いちゃいけないよ」
涼子は、翔太の頭を優しく撫でている。

「だって…泥棒とか入ってきたら、どうしよう?って思って…（；｜；）」
涙が、零れた。
「恐かったんだもん！お姉ちゃんと、お兄ちゃんはいつまで待っても帰ってこないし！（＜｜＞）」

……

「頑張ったね」
涼子は、翔太を抱き締めた。
「お姉ちゃん！」
翔太は、笑顔になった。

「翔太が笑顔になった事だし、そろそろ着替えていいかな?私の体は、子供には刺激が強すぎるしね」
そんな彼女は、下着姿。　しかも、刺激が強い…。
「台無しだよ…お姉ちゃん…」
力ない声だった。

6時間目【雑用係】

6時間目【雑用係】
ー朝の会ー
5年1組五班のメンバー←　班長：渡辺雫（ワタナベシズク）。
副班長：徳川祐介（トクガワユウスケ）。
書記：里村梓（サトムラアズサ）。
雑用：愛川翔太（アイカワショウタ）。

「何だコレ！！」
突然翔太は、叫んだ。
「授業中は騒がないで、静かにしましょうね～」
松下先生の、注意。
「アハハハハ（＾Ｏ＾）」
クラスメイトの、笑い声。
「翔太君は雑用係だけど、落ち込まないでね」
雫の、優しいフォロー。
「肉まんおごるから、元気出してね」
祐介の、気を使う言葉。
「でもさ～。雑用係って、おいしいよね（？＿？）」
梓の、芸人的考え。

「日本には、雑用係なんてあるのー（□；）！！」

ーお昼休みー
早速翔太に、雑用係のお仕事の依頼がやってきた。

「愛川君。私の妹に、消しゴムを届けてホシイんだけど」
「うん。ＯＫ（＾．＾）ｂ」

ニコリと、笑う。

「愛川～。松下先生に、このノート持っていってね」
「わかったよ～（＾－＾）」
愛想よく、応じる。

「翔太。ハンカチ落としたから、探してくれない？」
「はいはい」
適当に、応える。

－終わりの会－
翔太は、掃除もやらずに、寝てしまっていた。
「（－＿－）ｚｚ」
声をかけても、体を揺すっても、ジャイアントスイングをしても、
翔太は起きない。
しかし松下先生が、
「おきなさ～い。私の帰る時間が、遅くなるから～」
無理矢理起こした。

「どうしたの（・・？）」
「雑用係で疲れたんだ…」
「雑用係は楽しい？」
「全然（＜＿＞）」
「じゃあ、雑用係やめる？無理にしなくていいわよ」
「やめます！！！！」
「やめるのなら、キャンセル料１００万円ね（＊＾＿＾＊）」
「…」

数分後、テストで１００点をとったら雑用係をやめる事が決定した。

7時間目【国語／1】

ー5年1組／四時間目・国語ー『子猫達の華麗な冒険　著者：セニョリータ加藤』

子猫達の冒険は、今日も始まる。

「ニャアニャア（≧ω≦）」

「ニャニャ（・ω・？）」

二匹の子猫は、楽しそうに会話をしている。

「ニャーニャ（、ω′）」

「ニャア（「ω｜；）！！」

どうやら、嬉しい事があったらしい。

生徒達は、鋭い目付きで、『子猫達の華麗な冒険』を読んでいる。セニョリータ加藤先生は、こどもに大人気の小説家。なので、セニョリータ加藤先生の作品を、国語の授業で使う学校が年々増えている。

「みんな～！それじゃあ、問題だすわよ（＾Ｏ＾）／」

問題

子猫は、何を話しているでしょう（・・？）

〈考え中…考え中…終了〉

皆の答え←

回答者：翔太。

子猫達の冒険は、今日も始まる。

「お腹すいた～（≧ω≦）」

「何でなの（・ω・？）」

二匹の子猫は、楽しそうに会話をしている。
「運動したし（、ω´）」
「あっそ（｀ω｀；）！！」
どうやら、嬉しい事があったらしい。

回答者：梓。
子猫達の冒険は、今日も始まる。
「秋葉に行こう（≧ω≦）」
「なんで～（・ω・？）」
二匹の子猫は、楽しそうに会話をしている。
「同人誌買う（、ω´）」
「マジで（｀ω｀；）！！」
どうやら、嬉しい事があったらしい。

回答者：祐介。
子猫達の冒険は、今日も始まる。
「よろしくね～（≧ω≦）」
「なにが～（・ω・？）」
二匹の子猫は、楽しそうに会話をしている。
「劇場版だよ（、ω´）」
「ああっ（｀ω｀；）！！」
どうやら、嬉しい事があったらしい。

回答者：雫。
子猫達の冒険は、今日も始まる。
「何処に行く～（≧ω≦）」
「どうしよ（・ω・？）」
二匹の子猫は、楽しそうに会話をしている。
「フィリピン（、ω´）」
「ソコだ（｀ω｀；）！！」

どうやら、嬉しい事があったらしい。

生徒達の、個性的な回答を眺めながら一言、

「問題にする場所、間違えたかな…」

8時間目【松下先生】

5年1組の担任である松下結香先生は、若くて可愛い先生だ。
年齢は22歳なので、皆のお姉さん的存在。
そんな彼女、普段は優しくて可愛い先生だが、機嫌が悪くなると別人になるらしい…。

ー終わりの会ー
終わりの会では、今日あった嬉しかった事や悲しかった事等を、皆に発表して、皆で嬉しい事や悲しい事を共感しよう！というのが、狙いなのだ。

「今日は、皆の発表をやめます。何故かわかる？」
松下先生はニコニコと笑いながら、生徒達に質問をする。

「わかんな～い」
「何なんだよ～（ °∀ °）」
「何かなあ？」
生徒達は、ガヤガヤと騒ぎだした。

〈パンパン〉
「静かにしましょう！」
手を軽く叩き、生徒を静かにさせる。
「私は、貴方達には立派な大人になってホシイと思ってるの。私は残念ながら、立派な大人になれなかったけど、貴方達ならまだ間に合うの（、□、）！！」
松下先生のスイッチは、ONになった。
「だから、白状しなさい！誰が、こんなヒドイ事をしやがったの？」
どうやら、松下先生は機嫌が悪くなったようだ。

「何の事（・・？）」
「何で先生怒ってるの？」
「早く帰りたいよ…」
生徒達は、ガヤガヤと騒ぎだした。

「テメーラ、さっきからうるさいんだよ（、□′）ちょっとは、静かにできないのか？それぐらいできるだろ、お前らは赤ん坊じゃないんだしよ！」

5年1組の教室は、重苦しい雰囲気だった。

「松下先生。私知ってますよ～（v＜ー＜）」
と言うのは、雫。
「雫ちゃん、早まらないでよ！生きてお家に、帰れないかもしれないよ！」
翔太は、雫を必死に引き止める。
「大丈夫よ」

「お前は、知っているのか？教壇を真っ二つにした、常識はずれの奴を？」
松下先生の頭から、湯気がでている。
「教壇を真っ二つにしたのは、松下先生です（＜ー＜）」
無邪気に笑いながら、真実を話す雫ちゃん。

「殺される（「□」；）！！」
皆が、そう思った。

「コレが、証拠のムービーです」
そう言って、携帯の画面を松下先生の方へ向けた。

―数分後―
「私が悪かった！どうか許してくれ！この通りだ！」
松下先生は、土下座をしていた。

「楽しい担任だね～：雫」
「楽しくないよ…：翔太」

9時間目【七夕】

今日7月7日は、七夕だ。

七夕というのは、一年に一度この夜に牽牛（ケンギュウ）と織女（ショクジョ）の二つの星が、天の川で会うという中国の伝説に基づいたもの。

そして、願い事を書いた短冊をささ竹にかざるのが、風習である。

年に一度の特別な日に、彦星（牽牛）と織り姫（織女）は、どんなお話をするんだろう？

「今日って、七夕だよね」

「そうだね」

翔太と雫は、静まり返っている音楽室にいた。

二人以外は、誰もいない。

「彦星と織り姫が、年に一度だけ会える日…」

「かわいそうだよね…」

「好きな人と年に一度しか会えないのは、辛いよ。僕だったら、辛すぎて泣いちゃうかも（；―；）」

「私も…だって、大切な人に会えないし…」

外は薄暗く、雨が降っていた。グラウンドには水溜まりができ、誰も遊んでいる人はいない。

「もし…」

「…何？翔太君」

「もし、僕と雫ちゃんが、彦星と織り姫みたいになったら、どうしよう？」
「…」
「雫ちゃんは、幼なじみだし…友達だし…会えなかったら、淋しいよ」
「私も…」
「えっ？」
「翔太君に、毎日会えなかったら淋しいよ」
ザーッと、雨音しか聞こえない音楽室は、静寂。
二人は、俯いたまま、顔を上げない…。
「あえるよ…毎日あえるよ…」
「翔太君…涙が…」
「僕が雫ちゃんの手を放さないから、離れ離れにならないよ！（＜＿＞）」
「…」
「大切な人は、僕が守るんだ！僕一人の力で、守るんだ！（＞□＜；）！！」
「翔太君、落ち着いて」
泣き声だけが、静かな音楽室に聞こえたーーー

「わあっ（@□@；）！！」
翔太は、目を覚ました。
「…さっきの、夢かな？」
翔太は賺さず、カレンダーを見た。

7月7日ーーー

「えっ（＾-）じゃあ、リコーダーは…」
翔太は賺さず、ランドセルを取る。

リコーダー有りーーー

「…本当だったのかな？でも、夢かもしれないし…。どっちなんだー！神様でも仏様でもどっちでもいいから、教えてください！」

今日は七夕。彦星と織り姫が年に一度だけ会える、特別な日。

１０時間目【暇つぶし】

今日は土曜日。
翔太にとっては、転校してきて初めての休日。
しかし、

「お姉ちゃんは仕事で疲れて寝てるし、お兄ちゃんは遊び疲れて寝てるし…。休みだってのに、何処にも連れてってくれないよ！」

何処にも遊びに行けないみたいだ。

♪

翔太は暇つぶしに、愛犬のクロワッサン（ミニチュアダックスフンド）と遊ぼうと思ったが、いくら捜しても見つからない。
捜し始めて３０分、漸くクロワッサン（♂）を発見！　しかし、

「ｚｚ…」

幸せそうな顔をして、ベランダで寝ていた。
しかも、大の字で！
「暖かな陽光に当たれば、そりゃ幸せだろう…」
翔太は、クロワッサンの寝顔がムカついたので、ベランダの戸を閉めて鍵をかけた。

♪

何もする事が無くなった翔太は、キッチンへと向かう。
キッチンに着いた途端調味料置場から、ありとあらゆる調味料をテーブルの上に置いた。
そして、冷蔵庫からもありとあらゆる飲み物を取出し、テーブルの

上に。
一体、何を始める気だ？
「緑茶と醤油を混ぜたら、どんな味になるんだろう？」
どうやら、新しい飲み物の開発（？）をしているようだ。しかも、慣れた手つき（？）で飲み物を混ぜている。もしかして、頻繁に開発を行なっているのか？
♪
時計の針が3時を過ぎた時、開発は終わった。
「よし！次だｏ（＾－＾）ｏ」
と気合いを入れて、トレーニングルームへ走る。

トレーニングルーム到着！

トレーニングルームに来た目的は、サンドバックを殴って日頃のストレスを解消するためだ。

「まずイッパーツ！」
（つ，∀、）＝⊃
サンドバックは、大きく揺れる。
「打倒！亀○！！」
（つ，∀、）＝⊃
サンドバックは、くの次に曲がる。

「負けるもんかぁ〜！！」
（つ´∀`）＝⊃
サンドバックは、空間を舞った。

床に落ちたサンドバックに向かって一言、
「サンドバック…お前は弱い。出直してこい！」
そう告げて、翔太は去っていた。

♪
夜になり、姉と兄はやっと起床。

「翔太、おはよう」
「ご飯食べにいこうぜ〜」
翔太の部屋に入ってきた二人は、翔太を外食に連れてって機嫌をなおそうという、作戦だ。

「（ー＿ー）ｚｚ」

しかし翔太は、寝ていた。二人はこの様子をみて、静かに部屋を出た。

「明日は、何処かに連れてってあげましょう」
「そうだな。明日に備えて、もう寝るか？」

11時間目【ドライブ】

「何処に行きたい？お姉ちゃんが、何処にでも連れてってあげるよ（＾－＾）」
涼子は、いつもどおり下着姿。何故に彼女は、いつも下着姿なんだ？まあ、若いからいいんですけどね。

「僕この街の事あんまり知らないから、ドライブがいいなぁ～ｏ（＾－＾）ｏ」

「食パンを食べながらはしゃがない！少しは、落ち着きなさい」
下着姿の貴女に言われてもね…若いから許しますが。
「ご馳走様！さっ、早く行こうよ！一日はあっという間なんだから、迅速な行動が大切なんだよ！」
と朝から元気な小学生は、若くして社長になった姉の手を引っ張って玄関へと走り、ドアを開けた。

「私まだ下着だから、着替えてくるね（＾－＾）」
「少しは慌ててよ…」

－数分後－
「じゃあ、当てもなくさまようわね～ｖ（＾０＾）ｖ」
涼子は、上機嫌でそう言った。今日は彼女が運転手なので、少し不安…。
「シートベルトをしっかり付けないと、怪我するぞ」
何故不安かと言うと…。
「お姉ちゃんの運転は、ジェットコースターより恐いからね～（笑）」
涼子の運転は…。

命に関わる運転かも。

「でも、コメディーだから例え死んじゃっても、次の話では必ず生き返ってるよ～（笑）」

マイペースな涼子は、時々周囲の人を巻き込む。

「お前ら何が、（笑）だよ…。笑えねーし」

いつも拓真は、姉に巻き込まれる被害者だ。

「Ｌｅｔｓ　ＧＯ（＾Ｏ＾＊」

翔太は、楽しそうだ。

〈Ｃａｕｔｉｏｎ！〉

ここからは、勢いだけでお楽しみ下さい。

出発の前に、酔い止めの薬をお飲みになる事をお勧めします。

―ドライブ開始！―

「アッチに見えるのは、ファミリーレストラン晩餐会。店内はとてもアットホームで、家族連れが多いわね。ファミリーレストランだから、家族連れが多いのは当たり前かな？」

（ノ≧≦▽≦≧）ノ

「コッチに見えるのは、ホームセンターのソーナン。とりあえずココには何でも揃ってるから、探し物があるならソーナンに行きなさ

い！それとどーでもいい事だけど、遭難じゃなくてソーナンだからね～」

（ノ≧≦▽≦≧）ノ

「姉貴！信号無視すんな！事故ったらどうするんだよ（。д。）」
「アハハハ、楽しいよ～！もっと速く～＼（＾Ｏ＾）／」

「ソッチに見えるのは、レンタルでお馴染みのＴＳＵＤＡＹＡ。ＴＳＵＤＡＹＡのカードは、コンビニのノーソンでも使えるって知ってた？それとどーでもいい事だけど、農村じゃなくてノーソンね～」

（ノ≧≦▽≦≧）ノ

「ドッチかに見えるのは、Ｎの文字で有名なナクトドナルド。学生にも買いやすいように、リーズナブルな価格よね～。我が社も、見習わないといけない！」

（ノ≧≦▽≦≧）ノ
―ドライブ終了！―

「翔太。今日のドライブは楽しかった？」
「最高だったよ～（＾・＾）ｂ」
「事故らなかった事が不思議だよ…（ ―｜―）」

12時間目【オタク】

オタク…それは、ある事に関して誰よりも詳しい人の事を言う。
そしてそのオタクが、5年1組にもいたーーーーーー。

ー給食ー
本日のメニューは、
・肉まん
・焼肉
・肉団子
・肉親
という、肉だらけ定食！

「皆って、趣味は何？僕は、映画鑑賞だよ：翔太」
「私は、歌を聴くことかなぁ～（＊^▽^）：雫」
「僕は、小説を読む事かな：祐介」

残るは、一人だが…、
「そんな事よりさ、昨日のドラマ見た？合コンできない男っていうヤツ！」
雫は何故か、話題を変える。何でだろう（・・？）

「梓ちゃんの趣味は、何なの？」
何も知らない翔太は、何も考えずに尋ねてしまった。
「梓の趣味？梓の趣味はね…梓の趣味は…」
モジモジしてるけど、トイレに行きたいのかな？

（〃。。）σ＝ツンツン
「雫ちゃん？何？」

雫に頬っぺたをツンツンされた翔太は、雫の方へ顔を向ける。
「このノートに、なんて書いてるか読んでみて」
「うん…」
ノートには、

次回へ続く＼（＾Ｏ＾）／

と書かれていた。
「何でこんな事書いたの？」
「梓の趣味の話が、マニアックすぎて分からないか」
「えっ（゜д゜）」

もう引き返す事は不可能！

「私の趣味はね…漫画・ゲーム・アニメなの♪」
目が、☆キラキラ☆している。オタクだからかな？
「私の好きな殿方はね～、眼鏡が素敵なオタコン様なの～♪本名は、ハル・エメリッヒって言うんだよ！」
彼女は一体、何の話をしているんだろう（？＿？）
「こんなに素敵なのに、何で主人公じゃないのかが不思議なのよね～。スネークより、オタコン様の方が格好いいよネ♪」
どうやら、メタルギアソリッ○の事みたいだ。

「私は、四班に避難するから。あとよろしくね」
雫が逃げた（＜＿＞）
「僕は、頭が痛いし保健室に行くね」
祐介が逃げた（＜＿＞）
「ちょっと待ってよ！僕も逃げるよ！」
（σ、д,）σ））д）　。

「逃がさないよ♪貴方は、生け贄なんだから♪」

―その後―

「私は、ソラとリクよりロクサスが好き！だって、可哀相じゃん♪」

……

「ツトム様の作品は、最高ね♪スカイハ〇とか爆〇列島とか、最近では〇道がお気にだけどね♪」

……

「テニス〇王子様は、梓のお兄ちゃん達でイッパイだから、好きな作品なのよね～♪」

……限界だ。

13時間目【更衣室】

体育の授業が終わり、生徒達は更衣室へ向かう。

「男子は、女子更衣室に入らないように！」

と言うのは、体育担当の中田先生。

名前が秀樹(ヒデキ)なので、皆からはヒデと呼ばれている。

「小学生だし、まだそーいう事に興味ありませんよ」

と言うのは、呆れ顔をしている松下先生。

「最近の小学生は、ませてますからね～。興味あったり、しますよ（＾０＾；」

〈バコッッッ！〉

「犯罪者になる前に、成敗してくれる（、´）」

口より先に、手がでた。

―男子更衣室―

「お前ブリーフなの？まだまだ、お子様だな～」

「だって、ムシキン○好きなんだもん（＜＿＞）」

男性は、誰にでも経験があるのではないでしょうか？

「アレ、何やってんの？」

目を（？＿？）にしている翔太が、祐介に聞いた。

「アレはブリーフをはいている人を、からかっているんだよ」

「えっ？何で？」

「トランクスは大人！って感じがするけど、ブリーフはこども！って感じがするからかな～？」

そんな祐介は、からかわれたく無いのでトランクス。
「よく分からないよ…」
因みに翔太は、トランクスだったりする。

ー女子更衣室ー
「由美って、大地君の事好きなんでしょ？」
「えっ…（／／＾＾／／）」
「顔赤くなってんじゃん！大地君の好きなんだ～」
「違…うよ…（／／＾／／）」

女性は、男性と比べて大人ですよね～。

「梓は、好きな人とかいるの？私は、ヒ・ミ・ツ」
「梓はね～、好きな人いるよ～（ノ≧≦▽≦≧）ノ」
梓は、雫に抱きついた。
「で…誰なの？」
「私の好きな人は、エドワード様なの～（＾∀。）ノ」
「エドワード…？外人？」
「弟のアルも好みなんだけど、人じゃないしね～」
「人じゃないって…何？」
「でも、大差もいいかも」
「よく分からないよ…」

ー再び男子更衣室ー
「昨日のポ○モンみた？博士凄かったよね！」
「アレは凄いよね！博士レギュラーにしてホシイよ」
レッドとグリーンをやってた事を、思い出します。
「○ケモンは、アメリカでも人気だったよ～」

「そうなんだ？」
「僕は、デ〇モン派だったけどね～（＾皿＾）」
「愛川君って、ホントにアメリカに住んでたの？」

―再び女子更衣室―
「昨日のドラマみた？あの教師最悪だよね～」
「確かに！生徒を何だと思ってるんだろう？」

小学生って、ドラマとか見たりするのかな？

「雫も昨日のドラマ見た？私は勿論見たよ！」
まだ雫に抱きつていた梓が、耳元で言う。
「私は、寝ちゃったから見てないよ」
「そうなの？因みに、どんな夢を見たの？」
「銀河鉄道９９〇みたいな感じの、夢だったかも」
「羨ましいな～（；－０－）」

―その頃の５―１―
「遅い（「□」；）！！」
松下先生の機嫌は、悪くなった。

１４時間目【熱帯夜】

「アツイ…ξ゜Д゜ξ」
「冷房つけてくれ！」
「冷蔵庫にでも入りたい」
愛川家の皆さんは、リビングで内輪を仰いでいた。

今夜は熱帯夜。
暑くて寝苦しい夜ーーー。

「残念ながら、クーラーがないから冷房をつけれないのよね…」
いつもどおり、下着姿の涼子お姉様。
「お金はあるんだるから、買ったらいーのに！」
　オレンジジュース３本目突入中の、主人公の翔太。
「住所とか書くのが面倒だから、買わないんだよね」
冷えピタを、何故か全身に貼っている拓真。

「クーラーは今度買います！面倒だけど…：涼子」
「クーラー買う事は良い事だけど、姉貴のその格好はどうにかならない？：拓真」
「お兄ちゃんの言う通りだよ！お姉ちゃんがそんな格好だったら、僕…どうにかなっちゃうよ：翔太」

〈ナンデヤネン！〉

「でも、以外と涼しそうだな？どうなんだ？：拓真」
「う～ん。風が直に肌に当たるから、気持ち良いわね：涼子」
「何だか、癖になりそうだね（ｏ＜ｏ＜ｏ）：翔太」

〈そうですね！！〉

「涼しそうだから、下着だけになってみる！：翔太」
「それだけはヤメロ！お前はまだ、小学生なんだぞ！：拓真」
「アンタ…勘違いしてるわね？：涼子」

〈何の勘違いだ！！！〉

その時！
「最近引っ越してきた、愛川さんのお家は何処かな～（▼Д▼）y┻━┻～～」
愛川家の直ぐ側に、サングラスをかけてタバコを吸っている、いかにも怪しい男がうろついていた。
「この家は、小学生のガキが一人でお留守番する事が多い！だから、試しにお邪魔してみてよう」
と独り言を言って、足音をたてずに玄関前へＧＯ！
その時、怪しい男の耳に騒ぎ声が聞こえてきた。

「ヤメロ！やめてくれ！」
「アンタも一緒にやるんだよ！楽になるから！」
「早くやろうよ～」

コレを聞いた怪しい男は、汗を垂らし焦っていた。
「オイオイ…マジかよ？こいつら、一家心中するつもりなのか？止めないとヤバいよな…マジで…」
そう呟くと怪しい男は、急いで中庭へダッシュ！

するとそこには、家庭用プールで楽しそうに遊ぶ、三人の姿があった。

「皆でやるよ！スイカ割り（＾Ｏ＾）／：涼子」
「何で、一人ずつしないんだよ……：拓真」
「楽しいからだよ～：翔太」

怪しい男はため息をついて、静かにその場を離れた。

15時間目【鬼ごっこ／前編】

「鬼ごっこって何？」

日本生まれアメリカ育ちの翔太が、雫に聞く。

「鬼ごっこて言うのは、思いやりがなく惨い事をする鬼が、人間を狩るとても楽しい遊びよ♪」

雫は、笑顔でそう言った。

「マジで…」

翔太は、ビビッていた。

「鬼ごっこをする際は本物の鬼になる為に、人間を一人生け贄に捧げないといけないの…」

外は急に暗くなった。

「生け贄を神様に捧げると、神から鬼になるための薬を受け取る事ができる」

雨が降りだした。

「そして、鬼薬を飲む。薬を飲むと身体は鬼に支配されてしまい、コントロールが不可能となり心を乗っ取られてしまう…」

雷が鳴りだした。

「完全な鬼になってしまった人間は、己の命が尽きる迄人間を狩り続ける」

《キャァァァァァァァァ》

「ギャァァ！」
翔太は、気絶した。

ー数分後ー
「…つまり、外が急に暗くなったり雨が降りだしたり雷が鳴りだしたり悲鳴が聞こえたのは、ヤラセ？」
意識を戻した翔太が、雫と祐介とその他のクラスメイトに問う。

「梓が、放送室でＢＧＭを流してたんだよ」
「鬼ごっこは、楽しい遊びだからね（。▽。）」
「最後の女の人の悲鳴は、マジで恐かったよね～」

安心した翔太は、
「たちの悪い悪戯はやめてよ！心臓に悪いよ！」
元気イッパイだ。
「でも、楽しかったからいーじゃん（＾ー＾）」
雫の、優しい一言（？）。
「皆（読者様）が楽しんでくれたなら、僕は幸せだよ＼（＾Ｏ＾）／」
皆（読者様）の応援で、翔太は元気になった。

その時、
〈ガチャンッッッッ！〉教室の窓が勢い良く開けられ、物凄い音がした。

「梓…何事なの？：雫」

教室の窓（廊下側）から、何故か教室に入ってくる梓。

「最後の悲鳴どうだった？梓が大好きな声優の悲鳴にしたんだけど？」
「あの女の人声優だったの？さすがプロね～」
「えっ？雫何言ってんの？私の大好きな声優は、男の人だよ。聞いたでしょ？」
「えっ…（・＜・；）」
《キャァァァァァァァァ》今度は、本当の悲鳴が校内を反響した。

１５時間目【鬼ごっこ／前編】（後書き）

鬼ごっこをしていないので次回に続きますｏ（＾－＾）ｏ

１６時間目【鬼ごっこ／中編】

「じゃあ、改めて鬼ごっこって何？」
日本生まれアメリカ育ちの翔太が、雫に聞く。
「鬼ごっこて言うのは、思いやりがなく惨い事をする鬼が、人間を狩るとても楽しい遊びよ♪」
雫は、笑顔でそう言った。
「ちょっと雫ちゃん！ソレさっきも聞いたよ！」
翔太は、焦っている。
「冗談はコレぐらいにして、鬼ごっこの説明をするわね」
黒板へと走る雫。

【━鬼ごっことは…鬼にな━━った人が他の人を追い━━掛け、捕まった人が代━━わって鬼となる遊び。━】
（。・▽・）／
（っ　っ
「簡単な遊びでしょ？」
雫はわざわざ黒板を使って、説明してくれた。
「ルールもわかった事だし、鬼ごっこを始めよう！」
漸く鬼ごっこが出来ます。

━鬼ごっこ開始！━
鬼：オタコン。村人：アメリカン・ヒロイン・殿様・壊れかけのｒａｄｉｏ・ワインレッドの心・ズバリ言うわよ・ジミー・その他。

「…何でニックネーム？」
アメリカンが言う。
「たまに出さないと、皆忘れちゃうでしょ？」
ヒロインが言う。

〈天の声〉
詳しくは、４時間目【ニックネーム】を見てね（^・^）b

「せめて、本名ぐらいだそうよ？：アメリカン」
「作者が本名を決めずにニックネームだけ考えたから、それは無理だと思うんだけど？：ヒロイン」

（≧▽≦）σ＝

「渡辺雫！油断したな！」
雫は、忍び足で歩いてきた梓に背中を触られ、鬼となった。
「まだ時間はあるしね♪」
鬼となった雫は余裕の笑みを浮かべ、教室の隅っこへとゆっくり歩くーーーー

梓→鬼：雫。

「翔太！逃げるよ！：梓」
「う、うん…：翔太」
二人は急いで教室を出た。

♪

「逃げろ～！鬼が来たぞ～ｏ（≧∀≦＊）ノ」
廊下から、騒がしい声が聞こえてきた。

「５－１の子供達は、元気ですよね～（^－^）」
中田先生が、コーヒーを飲みながら言う。
「職員室付近では騒がないように！って、毎日言ってるんだけどなぁ～」

松下先生も、コーヒーを飲みながら言う。
「それより松下先生。その子、どうしますか？」
「そうね～…この子次第かなぁ。さあ、机の下に隠れてないで出てきなさい！」

「見つかっちゃった…」
松下先生の机の下には、ジミーがいた。

♪
「アレ、雫ちゃん。もう鬼じゃないんだ（・・？）」
「鬼は村人Ｌだよ」

〈Ｃｈｅｃｋ！〉
鬼の人は、鬼の顔のお面を付けなければいけない。

「村人Ｌって事は…今鬼は、壊れかけのｒａｄｉｏだね」
「彼は壊れかけなので、丁寧に扱わないと壊れちゃうから、慎重にね（^・^）ｂ」
「何で参加してんだ…？」

（≧▽≦）σ＝

「僕、これ以上走ったら壊れちゃうから、渡辺さんが鬼やってね」
壊れかけのｒａｄｉｏは息を荒くして、心臓の辺りを押さえていた。
「壊れかけ！保健室に直行だ！歩けるか？：翔太」
「部品が取れるかも（？）：壊れかけのｒａｄｉｏ」
二人は、急いで保健室へとダッシュ！

壊れかけのｒａｄｉｏ→鬼：雫。

「…ここまでは、シナリオ通りの展開ね♪」

雫は、そう呟いた。

１６時間目【鬼ごっこ／中編】（後書き）

鬼：オタコン。村人：アメリカン・ヒロイン・殿様・壊れかけのｒａｄｉｏ・ワインレッドの心・ズバリ言うわよ・ジミー・その他。

の「村人」は、梓が勝手に作った設定です。　鬼が村を支配しているから、村人と鬼で鬼ごっこをしよう！というよくワカラナイ設定です。　梓はたまによくワカラナイ事を言いますが、これからもよろしくお願いします。

17時間目【鬼ごっこ／後編】

「後書きに設定書くのは、反則だよね？」
翔太は、ぶつぶつ呟きながら逃げていた。

その時、
「鬼さんヤメテ！今年は、お米が育たないんだよ！」
と叫び声が下から聞こえてきた。

「…年貢？」
翔太は、そんな設定もあったのか？と思いながらも、階段を上ろうとしたが、

〈キーンコーンカーンコーン〉

予鈴が鳴ったので、お昼休みは終わった。

―5年1組―
「……翔太」
「……雫」
「……祐介」
「……梓」
教室に戻ってくると、ソコには不思議な光景が広がっていた。

「何でみんな、鬼のお面を付けてるの（・д・、）」

なんと、五版以外全員が、鬼のお面を付けていた！

「本物は一つだから、残りは全部偽物ね：雫」
「そーいう事か！：祐介」
「コレで授業するのかな？：梓」

「（・д・、）：翔太」

♪
本鈴が鳴り、授業開始！

「コレは超簡単ね～。大日本帝国憲法の発布以前につくられた憲法の私案を、私擬憲法と呼ぶ。ココは、テストで出すから覚えなさいよ～」

５時間目は、日本史です。でも、コレって小学生は習わないよね（笑）

ヒソヒソ…
「何で、松下先生も鬼のお面付けてるの？：翔太」
ヒソヒソ…
「さあ？多分イメチェンだと思う：雫」
ヒソヒソ…
「アレは間違ってると思うんだけどなぁ～：翔太」
ヒソヒソ…
「そんな事より、そろそろ静かにしないとチョークを投げられるよ：雫」

＝＝

「誰だぁ～！さっきからヒソヒソとウルサイ奴は！」
鬼のお面を付けているので、いつもより恐く感じる。
チョークは壁を貫通して、何処かに行った。
壁には、穴が空いていた。

（早くチャイム鳴ってくれ！頼むから鳴ってくれ！）」
翔太は、チョークが壁を貫通したのを見て、怖じ気付いていた。

その時、
〈キーンコーンカーンコーン〉

翔太の願いは叶った。

「翔太君！さっきの凄かったね。もう一回見たいな♪」
雫は、チョークの貫通を楽しんでいたようだ。
「二度と見たくないよ！」
―放課後―
「じゃあ今日は終わり！また明日ね～（＾∀。）ノ」
鬼のお面を付けながら、手を振っている。

「ふぅ…今日は疲れたし、早めに帰ろ」
溜息をつき、ランドセルを背負い歩きだす翔太。

だが、
「逃がさないよ！」
「鬼ごっこはまだ終わってないからね！」
「愛川覚悟～！」

「えっ（・д・、）」

翔太は何の抵抗も出来ず、鬼となった。

「最後に鬼だった愛川君には、一人で掃除をしてもらいまーす」
鬼のお面を付けていない松下先生が、ニコニコと笑いながら言った。

「何で、松下先生まで参加してるんですか？：翔太」
「詳しくは、後書きに書いてるらしいわよ：結香」
「またかよ！：翔太」

一人で掃除はドッキリで、この後皆で掃除をしました。

17時間目【鬼ごっこ／後編】（後書き）

何故松下先生が参加しているのかというと…。　職員室に隠れていたジミーに鬼ごっこドッキリの事を聞いて、面白そうだから参加したのだ（「□」；）！！　因みにドッキリを考えたのは、梓だったり…。　三話にわたってお送りしてきた鬼ごっこは、鬼ごっこをしていないような感じがするよくワカラナイ話でした。

１８時間目【薄い】（前書き）

今回は、影が薄い事でいつも悩んでいる殿様こと徳川祐介君の視点でお楽しみ下さい＼（＾Ｏ＾）／

18時間目【薄い】

こんにちは！僕は、５年１組五班で副班長をしている徳川祐介です（＾Ｏ＾）／
徳川という名字なのに、徳川家とは何も関係が無いのが、僕の唯一の自慢です。今回は、影が薄い僕がどれだけ影が薄いのかを、皆様にお見せしたいと思います。画面の向こうで、僕の影の薄さに哀れんで下さい。

ー放課後ー
「ゲーセンに行かない？今日小学生は半額だし：梓」
「半額だったら、町中の小学生が群がるわね：雫」
「バーゲンかよ！：翔太」
「ゲーバンかよ…：祐介」

ツッコミの後のツッコミは、非常にヤリニクイ…。　て言うか、僕のはツッコミなのか？業界用語っぽい感じがするような…。

「でもね～駅前のクレープも半額なの！世界三大珍味クレープが、まさかの半額だよ！ありえねぇ～：梓」
「クレープで食べるより、普通に食べた方が美味しいんじゃないの？：雫」
「そうだよね～：翔太」
「…ボケなないの！ツツツツッコマないの！：祐介」

最悪だぁ～（＜＿＞）言うの少し遅れたし、吃っちゃったし！いいトコ無しだ…。
よし！ここらへんで、僕も積極的に会話をしよう！　話題なんか、

何でもいいんだ！ベストを尽くせ～！

「ねえ×2みんな！今日図書館で、漫画喫茶をやるみたいだよ！しかも、ジュースとお菓子無料なんだってo（＾▽＾o）（o＾▽＾）o」

アクションを起こして、皆を注目させる作戦！

「祐介何やってんの～。急に踊りだして～：梓」

「そのダンスは、個性を感じるよ：雫」

「踊りたいなら一石二鳥公園で、ダンシング募金活動をしてるよ：翔太」

アレ？ひょっとして僕、注目の的？コレって現実か夢どっちなんだ？ほっぺたを引っ張って確かめよう！

つ（（（＞＜、）

「イタタたた…」

痛いよ…ほっぺた痛いよ。痛いって事は、現実？

「（＾皿＾）」

「（＊＾▽＾）」

「V（＊＾0＾＊）V」

皆笑ってるよ…僕を見て、大きく口を開いて笑ってるよ…。

「ケーキ屋で何かおごるけど、皆行くよね？」

笑顔の祐介。

「おごってくれるの？祐介は、優しいなぁ～」

笑顔の梓。

「私は、ショートケーキにしようかな♪」

笑顔の雫。
「ありがとう祐介！」
笑顔の翔太。

（＾―＾）

僕は前に進む事ができました！笑顔になれました！
だから皆も、笑おうよ。

19時間目【部活】

それは、登校中の雫ちゃんの一言から始まった。

「そーいえば、翔太君てどの部活に入ったの？」

雫ちゃんは、何故か僕の耳元で話す。ヤメテよね！

「まだドコにも入ってないけど、どうすれば入部できるの？」

アメリカでは、日本語を忘れないために“日本語部”に入ってたなぁ～。

「入部したいなら、まずは職員室に行って入部届けをもらわないとね」

雫ちゃんは、何故か僕の耳元で話す。癖になるよ！

「じゃあ、教室に行く前に職員室に寄っていい？」

世間は夏休みなのに、この作品の世界ではまだ夏休みじゃないんだよね。

「いいよ。職員室でも図書室でも、保健室でも」

雫ちゃんは、何故か僕の耳元で話す。快感だよ！

―職員室―

「失礼します！」
二人は元気良く言った。

すると、
「待ってたわよ（＾Ｏ＾）／」
松下先生が大声で手を振った。ここは職員室だから、静かにしなきゃイケナイんじゃないの？

「何で待ってたの？：翔太」
「私がメールで教えたのよ～（＊＾▽＾）：雫」
「なら話が早い！：翔太」
「とりあえずこのプリントに、どんな部活があるのか全部記入してるから、目を通しておいてね」
松下先生は、翔太にプリントを渡すと立ち上がった。腕時計を見て翔太の方を振り向いて、一言、
「一応帰宅部はあるんだけど、帰宅部はヤバいからやめときなよ…」

「えっ（・・？）」
翔太は、首を傾げた。
（ヤバいって何だろう？）
そして松下先生は、慌てて職員室を出ていった。

「とりあえず、目を通しておこう…」
そう言うと、翔太はプリントを見た。

――――――――――――――――――――――――天上天下小学校部活動←

―運動部―
卓球部・サッカー部・ハンドボール部・バスケ部・柔道部・野球部・陸上部・テニス部・相撲部・水泳部・ゴルフ部・バドミントン部・アメフト部・剣道部・バレーボール部・ソフトボール部・ボート部・

カバディ部・ゲートボール部・ボクシング部・競馬部・Ｋ－１部・競艇部・帰宅部

「…多すぎだよ（＝＿＝）」
翔太は少し呆れていた。
「しかも、何で運動部に帰宅部が入ってんの？」
疑問は残るが、続いては文化部を見てみよう。

天上天下小学校部活動←

－文化部－
吹奏学部・漫画研究部・美術部・家庭科部・科学実験部・茶道部・演劇部・読書感想部・声優部・放送部・世間話部・華道部・パソコン部・流行部・歌手部・パティシエ部・ファッション部・お笑い部・歌舞伎部・落語部・料理の超人部・ネットアイドル部・小説投稿部・鑑賞部・帰宅部

「…（＝＿＝）」
翔太はあきれ返ってものも言えない。

－１０分後…－
怒り狂った松下先生に、
「サボったのか！私が嫌いだからサボったのか！嫌いなモノをイツまでも避けていたら、お前はイツまでもダメ男だぞ（「□」；）！

！」

説教されました。

どうやら、チャイムが鳴った事に全く気付かなかったみたいです。

「スミマセンｍ（＿＿）ｍ」

でも何で、運動部と文化部の両方に帰宅部が？

何だか、凄い存在感だよ。

２０時間目【入部】

僕は悩んでいる。
オニギリに入れる具材を、鮭か昆布どっちにしよう？ってぐらい、
悩んでいる。

「一昨日から何か考えてるけど、どうしたの？」
水玉模様のワンピースが可愛い雫が、ぼ～っと天井を見上げている
翔太に尋ねる。
「鬱なんだ…」
翔太は、小声で言った。
「そうなんだぁ～。どの部活に入るか、一昨日から悩んでたんだ？」
鬱という単語を無視した雫は、翔太の悩みをズバリ言い当てた。
「…実は熱中症でさ」
翔太は、大声で言った。

すると、
「熱中症だと！そんな事は早く言え（ □ ； ）！！」
松下先生が走ってきた。

「スミマセン。冗談です」

（つ、□、）＝つ）、д ゜）

―放課後―

「ん～（~ ＜~ ）」
一昨日松下先生から渡された二枚のプリントを眺め、翔太は何やら悩んでいる。

「そんなに悩んでいるのなら、私が所属してる部活に入部してくれない？」
蜘蛛のピアスが格好良い雫が、勧誘を始めた。
「誘ってくれるのは嬉しいけど、帰宅部にしようかなぁ～って思ってるんだ」

ナンダッテ！！！！
Ш（ 。■ 。；Ш）

「し、雫ちゃん…顔恐いよ。ヒロインが、そんな顔しちゃイケないんじゃ…」
翔太は、雫の恐ろしい顔を見て後ずさる。
「翔太君！入部する気になったよね（・・？）」
いつもの可愛い顔に戻った雫は、再び勧誘を始めた。
「これからヨロシク…」
強制的に入部させられた翔太は、雫の後を着いていく。

ー北校舎二階ー
北校舎は、天上天下小学校部活動の部室だけがある、日当たり最悪の校舎。
そんな北校舎の二階の廊下を歩いていると、外から大声が聞こえてきた。

「帰宅したいかぁ～！」
〈オォォォォォォォォォ〉
「早くチャットしたいかぁ～！」
〈オォォォォォォォォォ〉
「何じゃコレ…」
「コレが、帰宅部だよ」
「では位置について～！ヨーイ…ドン（≧∇≦；）！！」
〈バァァァァァン！！┛〉

「帰宅部が帰宅する時は皆で気合いを入れた後、両手を地面に着けたクラウチングスタートの格好で号砲を待つの。そして、クラウチングスタートには3パターンがあるの。バンチスタート、エロンゲーティッドスタート、ミディアムスタート…どれを使うかは自由らしいよ」
「帰宅部に入らなくて良かったかも…」
「安心するのは、少し早いと思うんだけどなぁ～」
「えっ（・・？）」

ー数分後ー
「…（／／o／／＊）」
「翔太君！恥ずかしがらないで。男の子は翔太君だけなんだから、頑張って！」
雫は、応援している。

「やっぱり、男の子にバニーガールのコスプレは駄目かな？じゃあ次は、レースクイーンね～」
カメラを持っている梓は、翔太を撮りまくる。

「帰宅部の方がマシだ…」
翔太は無理矢理入部させられた梓部で、オタな世界へと入り込んでしまうのか？ご期待下さいo（＾ー＾）o

２１時間目【俳句／盛夏】

総合学習の授業は毎週勉強する事柄が違うので、生徒達に評判なのだ。

「今回の総合学習は五・七・五でお馴染みの、俳句をやってみたいと思いまーすｏ（＾▽＾ｏ）」

「俳句ヤダ～」
「年寄りみたいだよ！」
「つまんない…」
どうやら、小学生の少年少女には不評のようだ。

「何？その態度…貴方達は、それでも日本人なの？日本人なら、俳句の素晴らしさを理解できるでしょ？理解できない奴は、二度と町を歩けなくしてやろうかしら（｀´）」
どうやら、松下先生の機嫌が悪くなってきたようだ。

すると生徒達は、
「ビバ俳句（＊＾▽＾）」
「早くやろうよ～」
「俳句は素晴らしいね！」
急にやる気を出した。
「皆が興味を示したところで、簡単に俳句の説明をするわね」

俳句とは…五・七・五の三句、十七音でできている短い詩。

季語を入れるのが原則。
俳諧連歌の発句が独立したもの。俳諧。

（。・▽・）／
（　つ　　つ

「簡単でしょ？じゃあ、早速考えてみてネ」
松下先生は教師用の机に戻り、雑誌を読み始めた。
―考え中…―
「季語っていうのは、季節の感じをあらわすために、とくに定めてられている言葉だよね？：翔太」
「そうだよ。例えば、菜の花とか向日葵とかかなぁ～：雫」「季節っぽい単語を、一つ入れたらいーのか：祐介」
「俳句って、国語の授業にしたら良くない？：梓」

〈Ｔｉｍｅ　Ｕｐ　（ｏ；＿ω＿）ｏ〉

「それでは盛夏にピッタリな俳句を、皆一斉に黒板に書いて下さ～い」
混雑するだけだろう！

―俳句発表！―
「全員の作品を見てる時間は無いから、一部だけ紹介しますね～ｏ（＾－＾）ｏ」

向日葵が　お日様浴びて　笑ってる　（作：愛川翔太）

切ないね　線香花火　落ちる時　（作：渡辺雫）

スイカ割り　一人ですると　淋しいよ　（作：徳川祐介）

暑いから　家にこもるよ　夏休み　（作：里村梓）

「皆上手ね～。でも、私の作品と比べたら下手だけどね～＊ー ー＊」
松下先生は、自信満々に言った。

「先生の俳句見せて！」
「早く黒板に書いてよ！」
ガヤガヤと騒ぎだす生徒達。

「静かにしなさい！コレが、私の素晴らしい俳句よ」

夏祭り　今年も一人　彼氏いない　（作：松下結香）

この後、5年1組の教室は涼しくなったような感じがしたとかしないとか…。

２２時間目【ラジオ体操】

今日から夏休み！
気分は７月２１日です！

「お姉ちゃ～ん。朝ご飯まだ～？」
夏休みだというのに、翔太はいつも通り7時に起床。　目を右手で擦り、リビングのドアを開けた。しかし、

シーン…

リビングには誰もいなくて、冷房を付けていないこの部屋は暑いだけだった。

「暑い…この暑さはまるで、ＢＷ・砂漠気候のようだ」
翔太君の例えは正しいのか分からないが、それぐらいアチィ～って事だ。
「お姉ちゃんとお兄ちゃん、まだ寝てんのかよ…。夏休みだからって、ダラダラしやがって！」
姉と兄にイラッときたので、麦茶が入っているペットボトルにマスタードを入れた、ちょい悪小学生。

「（＾ω＾）ｖ」

―一石二鳥公園―
ここは、市民の憩いの場。ここは、市民の癒しの場。

何故一石二鳥という単語が付いたのかは誰にも知らないが、この公園は皆に愛されているのだ。

「なになに…ラジオ体操に毎日参加したチョ～偉いお子様には、誰が見てもカツラだってわかっちゃうカツラを彼此数十年も付けちゃってる市長から、皆勤賞として世界半周ペアチケットを何と一組２名様にプレゼント！…（。―。）（。―。）」

コレ本当ですか？

翔太は目をキラキラさせながら、オバサンに問う。

「本当よ。因みに、カツラの事も本当よ」

オバサンは、子供会を手伝っている近所のオバサン。彼女は子供の事が大好きで、学校の行事にはかなりの出現率で現われる事で有名な、アンジェリーナ・ジョリーさん（仮名）。

「じゃあ、世界半周目指して今日から頑張る！」

朝から元気イッパイだ。

「私の体操に、ついてこれるのかしらね～（＾―＾）」

―体操開始！―

眠そうな顔をした子供たちが、青空の下ラジオ体操に励む。

「じゃあ、ラジオ体操開始ね♪最後までちゃんとできたら、シール貼るからね」

そう言って、オバサンはラジカセを操作した。

…

……

……

……σ＊・ω・）σｙｏ！

ラジカセから、ｙｏ！という予想外の単語が聞こえてきた。しかも、大音量で。

「さあ、皆が大好きなラップｙｏ！リズムに合わせて踊りまくるわｙｏ！」

オバサンはノリノリだ。

右手をね！左手をね！グルグル回してハリケ～ン！

『ハリケ～ン（恥）』

空見上げ！地面見て！正面向いてヨロ乳首！

『ヨロ乳首（恥）』

目を瞑り！目を開けて！連続瞬き挑戦中！

『挑戦中（恥）』

ー体操終了ー

「あらまぁ。最後まで残った人は、一人もいないの？貴方達…若いのに体力無いわね～ゞ（・д・、）」
オバサンはぽっちゃりとした体系で、まだまだ身軽に踊っている。

「何だか疲れた…∴翔太」
日陰のベンチに座り、元気無く呟いた。

23時間目【クーラー】

「ただいまぁ～」
炎天下の下、ラジオ体操を終えた翔太が帰ってきた。ドアの隙間から、熱気が家の中に入ってきた。
髪の毛は汗で濡れていて、Tシャツも汗でビショビショ。翔太は、汗だくになっている。

「おかえり～。それにしても、夏休みだってのに御苦労様だよなぁ～。自慢じゃないが、俺はラジオ体操は三日坊主じゃなかったぞ」
トランクス一枚で、拓真はカリカリ君を食べていた。

「そーいえば、何でお兄ちゃんまで汗だくなの？」
兄と同じく汗だくの翔太が、汗だくの兄に聞く。
「それがさぁ～。クーラー付けるのが大変でさ」
弟と同じく汗だくの拓真が、汗だくの弟に答える。

「そこの汗だくブラザーズ！さっさと、お風呂に入ってきなさい（ー□ ；）！！」
リビングから、涼子の声が聞こえた。多分彼女は、クーラーがフル稼働中のリビングから、一歩も外に出たくないんだろう。

「人の苦労も知らないで」
「お兄ちゃん！早くお風呂に入るよｏ（＾ー＾）ｏ」

――――――――――――――――野郎の入浴シーンは、カットしちゃいま

す。

「何でカットするんだ！女性読者の事も考えろ！」
「お兄ちゃん！暑いからリビングに行くよ！」

ーリビングー
ソファーの上には、涼子が寝転がっていた。
今日は会社の人が来たので、下着ではなくビキニだ！彼女の普段着は、下着かビキニしか見た事がない…。出掛ける時は、何故か毎回スーツを着ちゃう。

「あの子達にやらせたら良かったかなぁ？拓真に迷惑かけちゃったしね～」
涼子は、暇な時は独り言を大声で話す。涼子を一人にしてしまうと、淋しくて泣いちゃう恐れがある。

〈ガチャッ！〉

「わぁ～！涼しぃ～！」
そんな翔太は、下着一枚。
「クーラー最高だな！」
そんな拓真は、下着一枚。

「二人とも偉い！やっと、下着姿が素晴らしい事に気付いたのね？‥涼子」
彼女は何故こんなにも、下着に拘るのだろうか？

「着替えがなかっただけだよ：拓真」
クーラーの前で、仁王立ちになっている。
「なんだ…機嫌が良くなかったから、お小遣いでもあげようかなぁ～と思ってたのに残念：涼子」
同じくクーラーの前で、仁王立ちになってみる。
「何円ぐらいくれたの？」
クーラーの風力を最大にした。
「５００円かなぁ」
クーラーの温度を下げまくった。

その時、
「カリカリ君が無い！お小遣いで買った、常呂店味・唐辛子味・明太子味がドコにも無いよ（；＜０＞）ノ」
今にも泣きだしそうな声が、キッチンから聞こえた。

「ごめん。翔太のカリカリ君、私が食べちゃった」
そう言いながら、翔太に近づく。そして、ｈｕｇ。
「お詫びに、今日一緒に寝るから。許してくれる？」
「うん…」
翔太の頬っぺたは、少し赤くなっていた。
「照れなくていいわよ。寝るだけだから」

「お姉ちゃん…僕、頭が痛くてとても寒い…」
言い終わった直後、翔太はその場に倒れ臥す。

２３時間目【クーラー】（後書き）

冷房を付けた涼しい部屋はいいですよね！　　でも、あまり冷房を付けた部屋にいちゃ駄目ですよ！たまには、外に出るのも気分転換になっていいかも☆皆さんは２８℃にしてますか？僕はやってます。　　妹は、１９℃にしてました。扇風機はあまり電気代がかからないみたいなので、オススメですよ！試してくださいネ（＾Ｏ＾）／

２４時間目【夏風邪】

ダルい…体に力が入らなくて、動けない…

「コレは、ただの夏風邪ね～。多分寝たら治ると思うから、おとなしくしときなさいよ」

事は無いけど、頭が痛くてダルいのです…。

「お姉ちゃん…」

「そのお願いは無理よ。だって、買いに行くの面倒だし。それに、ただの夏風邪だから必要ないと思うしね」

「まだ何も言ってないんだけど…」

「メロンを食べたいんでしょ？病人＝メロンってありがちすぎるから、インパクトがあった方が良いわね。例えば、病人＝ドリアンみたいにね。コレだったら、買ってきてあげるけど？」

「王は食べれないよ…」

♪

〈トントン〉

ドアをノックする音が聞こえた。ダルイので、無視する事にした…。

〈トントントン〉

再びドアをノックする音が聞こえた。ダルイので、再び無視する事にした…。

すると、
〈大佐！何も応答がありませんが、愛川二等兵は無事でしょうか？
もし、手遅れだとしたら私の責任ですよね？えっ…
「お前は何も悪くない。悪いのは、この戦争を起こした俺の親父なんだ！だから、自分を責めるな」
ですって？〉
梓の声が聞こえた。

「…コレは、戦火中の禁じられた恋だったかな？」
そんな事より、何で梓がいるんだ？まあ…いっか。

♪
はぁ…寝たら治る！って言われると、却って寝れないよ。それだったら、
寝ないと手遅れになるかもしれいから、さっさと寝なさい！
ぐらい言ってくれた方が、寸なり寝れるかも。
「（◎ー◎；）」
目はパッチリ開いていて、欠伸も全く出ないし…全然寝れないよ。
そーいえば日本人って、寝れない時は羊を数えるんだよね？全然寝れないし、試してみようｏ（＾ー＾）ｏ
羊が一匹…羊が二匹…羊が三匹…羊が四匹…。

駄目だ！羊だと、未(ひつじ)と勘違いしてしまう。

※未
十二支の第八番目。馬の次。　昔の時刻・時間の呼び名。午後二時ごろ。また、その前後二時間。　昔の方角の呼び名。南南西。

次は、何を数えよう？
やっぱりコレだよね（＾＾）ｖ

メロンが一個…メロンが二個…メロンが三個…メロンが四個…メロンが五個…。

何だか、目の前にメロンがイッパイあるような感じがするよ…。ココは、夢の世界なのかな？

「（ー＿ー）ｚｚ」
翔太は寝息をたてて眠っていた。

２４時間目【夏風邪】（後書き）

夏風邪ってタイトルですが、あんまり関係なかったですね（笑）

夏にひく風邪が夏風邪というので、このタイトルを付けてみました（＾Ｏ＾）／　皆さんも風邪に気を付けて、夏をお楽しみ下さいね！

25時間目【海水浴場／1】

青い空、白い雲、そして、人がイッパイのビーチ。

「人多いわね…だから、海は嫌だったのよね」

泳ぐ前から不機嫌な涼子は、そう言いながらも既に水着を着用済み。

「海の家での食事は無料なんだから、機嫌直してよ。それとついでに、ちゃんと男も用意したからさ」

拓真は重い荷物を下ろし、涼子に言う。

「ホントに？男がいるなら、機嫌直すわ（＾－＾）」

鼻歌を歌いながら、一人先へ進む。

「俺は、コイツらの面倒を見なきゃイケないのか…」

「フランクフルトとアメリカンドッグだと、どっちの方が好き？：翔太」

「私は、フランクフルトかなぁ：雫」

「僕は、アメリカンドッグが好き：祐介」

「私も祐介と同じく、アメリカンドッグ！：梓」

そんな事で今日は、皆で海に来てます！

昨夜僕が、

「海行きたーい（；＜０＞）」

と激しく喚いたお陰かも。それで、お兄ちゃんの友達が丁度海の家を家族で始めたらしく、行こう！って事になりました。

食事が無料になるから、連れてきてくれたのかもね。

「そーいえば、お姉ちゃんは何処に行ったんだろう？お兄ちゃん知

ってる？」
翔太は、重い荷物を持たされている拓真に聞いた。
「ん？知らないな～。アイツ馬鹿だから、迷子になってたりして」
本当は、新しい彼氏をさがしにきたんだけど…こんな事は、言えないしな。
「迷子？じゃあ、迷子のお呼び出しをしなくちゃ！」

♪

「貴方が噂の、愛川涼子さんですか？」
海の家に向かう途中、女性が絶叫しているTシャツを着ている男に、話し掛けられた。
「アラ…その服良いわね。私は、女性が二股していて彼氏に見つかったらどうしよう？って考えてるTシャツを、持ってるわよ」
ソコは触れなくていいでしょう？触れなければイケない事は、他にありますよ！

「…愛川涼子さんですよね？間違いありませんか？」
女性が絶叫しているTシャツを着ている男が、再び涼子に聞く。
「そうですけど、貴方は？もしナンパだとして、私の事が好きならば、年収を知っておく必要があるの。さあ、どうする？」
彼女はまず、年収を聞く癖がある。コレは、やめた方がいいですよ！

「話の続きは海の家で話しませんか？暑いですし」

♪

海で遊ぶ前にやる事があります！それは何でしょう？

A）スイカ割り
B）ポロリ
C）ビーチバレー
D）準備運動

「Bのポロリで……梓」
「ライフラインはまだ三つ残ってますが？‥雫」

（／ω＼）
（σ、д,）σ）） д）。
（＾ε＾）

「Bのポロリで！‥梓」

〈コラッッ！〉

「さっさと準備運動しなさい。言う事を聞かない悪い子は、日陰に入れないぞ」
拓真は、一人でテントを張りながら言った。

「みんな！準備運動しなさい（「□」；）！！」
とても日陰に入りたい、翔太が叫んだ。

25時間目【海水浴場／1】（後書き）

海とかプールに三年ぐらい泳ぎに行ってません。　ですがこの前、友達とパイレーツ・オブ・カリビアン　デッドマンズ・チェストを見に行きました！その前は、ブレイブストーリーも見に行きましたね。少し話はそれましたが、日焼けするから海とかプールに泳ぎに行かない！って言うのがあります。皆さんは、何処かに行きましたか？

26時間目【海水浴場／2】

青い空、白い雲、そして、人がイッパイのビーチ。

「浮輪とゴーグルを装備したし、海に行こうよ！」

兄の手をひっぱる翔太。

「俺は海水パンツを装備しているけど、泳がないよ。…ポロリビーチは危険だから、ティッシュは必須だね。鼻血が出るし…」

面倒臭そうな顔をして、セリフを棒読みの拓真。

〈カット（！△！）〉

「拓真お兄ちゃん。どうして、感情を込めてセリフを言えないの？

梓が折角徹夜で台本作ったのに…」

瞳をウルウルさせている、アキバ系の梓。

「そんな事言われても、急に台本渡されて感情を込める事なんてできないでしょ？てか、お子様は海で遊んできなさい！」

子供の面倒をみようとしない、愛川家長男拓真。

すると梓は、

「お兄ちゃんの馬鹿！梓の事大好って言ったのに、他の女を好きになったのね！もうお兄ちゃんなんて、大嫌い！」

泣きだしてしまった。

「遊んでやるから早く準備しろ！それと、そこのパッとしない奴は荷物の見張りをヨロシクな！」

急に優しくなった、愛川家長男拓真。

「えっ…僕（・・？）」

テントに一人残されたのは、夏休みの宿題は全部7月にやってしまう祐介。

♪

海の家、森林浴。

思わず店名をツッコミたくなる名前だが、ソコらへんは無視する事にしよう。　水着姿の男女がジャズの流れる空間で、静かな時間を過ごしていた。

「へぇ～。じゃあ、その為には何でもするんだ？でも、それって危険だからやめた方がいいと思うよ」

何の話をしているんだ？

「危険と分かっていても、芸術的なTシャツを探すのはやめられません」

どうやら、Tシャツの話で盛り上がっているようだ。でも、危険って何だ？

「で…貴方は誰なの？」

「…僕は、愛川の友達の木村です。皆からは、キム兄って言われています」

「ふ～ん。で、キム兄は私に何の用なの？」

「涼子さんの彼氏オーディションを、開催するんじゃないですか。忘れないで下さいよ！主役なんだから」

笑いながらそう言うと、キム兄は立ち上がった。

「彼氏になりたいね～」

「個室に彼氏候補達が待ってますので、行きましょうか？食べ物もありますよ」

「個室まで用意してくれるなんて、嬉しいわね」
涼子はスキップをしながら、個室へ向かった。

♪

アツい！アツいよ！！
早く冷たい海に入らなきゃ丶（，д，；≡；，д，）丿

「アイツ…頭悪いよな。サンダル履いたら熱くないのに、何でわざわざ裸足で砂浜を歩くかなぁ？」
拓真は腕組みをして、水際で偉そうにしている。

その時…

「お兄ちゃん、どいてよ！そんな所につっ立っていたら、人身事故になっちゃうからどいて～！」
拓真の方に向かって、勢い良く走ってくる翔太の声が聞こえた。

＝＝＝（ノ＊□＊）ノ

「ちょっ、危ないって！海は冷たいから、ゆっくり入らないと心臓がビックリするだろ！だから止まれ！」

〈バチャン！〉

メラメラと燃える太陽の下、水しぶきが上がった。

27時間目【海水浴場／3】

青い空、白い雲、そして、人がイッパイのビーチ。

「てかさ…何なんだよ？この人の多さは。全く泳げないじゃん…」

拓真は、目に映った光景をそのまま言った。

「皆行くトコないから、海に来てるんだよ！」

ゴーグルを付けている、翔太が言う。

「今のところポロリは0ね。楽しみにしてたのに！」

梓の自由研究は、今証されるポロリの秘密！らしい。

「海って何で塩があるんだろう？気になる…」

海に顔を付けている雫は、心の中でそう思う。

そんな男女四人は、浮輪を装備していた。

足は地面に着かなくて、皆バタバタさせている。

「お兄ちゃん！ここ海なのに、何でコイとかフナが泳いでないの？ひょっとして、彦麻呂が原因（・・？）」

弟からの質問に兄は、

「よく知ってるなぁ。ヤツは、地球にある食材を全部食べ尽くしてしまおうと思っているらしいぞ」

ホントは、

コイやフナは淡水魚だから海にはいないのです。

「彦麻呂許さない！阿藤快さんの敵は、僕が討つ！」
翔太は敵討ちの為に、芸能界へ入る決心をした。
「…アホか」
翔太の頭を優しく叩いた拓真だった。

♪
個室は、険悪な空気が流れていたーー

「何で、私の彼氏候補が高校生なのよ（「 ^-' ）」

〈Ｃａｕｔｉｏｎ！〉
涼子さんはご立腹ですので言動には注意しましょう。

「…高校生Ａ」
「…高校生Ｂ」
「…高校生Ｃ」
高校生三人は、人生最大のピンチを向かえているのかもしれない…。

「と、とりあえず何か食べますか？」
そう言ってキム兄は、枝豆を食べ始めた。
「そうね…無料なんだし、食べなきゃね」
そう言って涼子は、お寿司を食べ始めた。
高校生三人は、どれにしようかなぁ？とゆっくり考えた結果…ポップコーンを食べよう！と思い、ポップコーンに手を伸ばした。

その時！

「あれ？椅子多くない？まだ、私の彼氏候補が来るの？今度は、高校生じゃないでしょうね…」

涼子が、三脚の空席の椅子を見つけた。

「何言ってるんですかぁ～。もう彼氏候補は来ませんよ！残りの三人は、涼子さんのお友達の席ですよ」

キム兄は、お腹を押さえて笑っている。

「…そうね、そうだったわね。どうやら、暑さでどうにかしてたみたいね。じゃあ、ちょっと電話してくるから待っててね」

涼子は、足早に個室を出って行った。

♪

相変わらず男女四人は、浮輪を装備していた。

足は地面に着かなくて、皆バタバタさせている。

「ねえ、みんな。プカプカ浮いてるのも飽きてきたから、あそこまで勝負しない？最下位の人は、罰ゲームをやってもらいます」

雫が指を差したのは、沖の方にプカプカ浮かぶ長方形の形をしたモノだった。　そこには、人が何人か座っていた。

「面白そうだし、俺は賛成。大体、小学生に負けるわけないし：拓真」

「僕は勝負とか嫌だなぁ。絶対勝てないし…：翔太」

「罰ゲームは、ポロリね！：梓」

絶対に負けられない戦いが、そこにはあるーー

♪

涼子は、店の外で電話をかけていた。

『…つまり、２８時間目までに海の家に来いと？』

「ゴメンね…事情はあとで話すから、急いで来てくれない？」

『私は行けませんが、今から海に行くと言っていた方が三人います』

「その三人に伝えなさい！社長がとても困ってるから、２８時間目までに来なさいと！」

『分かりました。そう伝えておきます…』

「ありがとうね！さすが、私が一番信頼しているだけはあるわね。貴女はきっと、次期社長ね～。冗談よ、冗談（笑）」

『プー…プー…プー…』

涼子は再び、海の家森林浴の個室へ向かった。

28時間目【海水浴場／4】

青い空、白い雲、そして、人がイッパイのビーチ。

「ハァ…疲れた…：翔太」

「お前ら若いくせに体力ないなぁ～：拓真」

「大人気ないですね：雫」

「競争シーンは都合によりカットされたから、皆お疲れさま！：梓」

えっ？今なんて……

「だから～。カットされたのにあんなに頑張って、お疲れさまって：梓」

ばんなそかな！

「そーいえばもう、お昼休みはウキウキウォッチングする番組が終わったから、1時だな。海の家に昼食食べに行くか？：拓真」

「賛成！：翔太と雫」

「海の家に行くまでのシーンは、カットされるんだけどね～：梓」

ばんなそかな！

♪

海の家、森林浴。

そろそろこの名前にも慣れてきた。しかし個室にいる高校生三人は、

女性陣のテンションに慣れなかった。

「それでさぁ～。ムカついたから、ソイツの大事なトコロを渾身の力を込めて、蹴り上げてやったのよ！」
「アハハ、それ超ウケる。生放送の歌番組で、歌詞を忘れた歌手ぐらいウケる」
「その後どうしたの？」
会社帰りに海に遊びにきたｏｆｆｉｃｅ　ｌａｄｙ三人は、来た早々ハイテンション！
この光景を見た高校生三人は、俯いていた。

「元気ないぞ。元気が無い時は、ビールが一番！遠慮しなくていいから、ドンドンドン飲めよ（＊＾ー　）ノ」
そんなキム兄は、お酒には強い。
「未成年ですし」
「お酒は」
「飲めません」
高校生三人は、一言ずつ言った。息ピッタリだ。　「…ツッコンでほしかったのは、ドンドンドンだったんたけど。まあいっか」

♪

「…なんて言う店だったかな？：拓真」
「友達がやってる海の家忘れたの？お腹空いたから早く思い出してよぅ：翔太」
「かき氷はいちご味が一番美味しいよね～：雫」
「そう？何もつけないで、そのまま食べた方が美味しいと思うけどなぁ～：梓」
海で遊びお腹を空かした四人は、拓真の友達がやっている海の家で

昼食を遠慮なく食べようと思ったが、店名を忘れてしまった為炎天下の中をブラブラと歩いていた。しかし、

《姉貴のカードをこっそり取ってきたし、何処の海の家でも昼食を遠慮なく食べれるんだけどね～》

と拓真は思ってたりしていた。そしてニヤリと笑い、

「この近くにある、フレンチの店に行かない？水着でもＯＫだし、冷房がかかってるから涼しいよ～。一応海の家らしいよ、年中営業してるけど」

思い切った行動に出る。

『＊ﾞ ∀ﾞ）ｂ』

小学生の三人は、フレンチの店へと走りだした。

「ハハハ…海の家に行くまでのシーン、カットされてないじゃんか（笑）」

拓真は、汗を拭い歩きだす。

♪

その頃ーーーー

「皆まだ泳いでるのかな…凄い体力だよね…それにしても…アツい（×＜×）」

一人淋しくテントの中で、皆を待つ祐介だった。

28時間目【海水浴場／4】（後書き）

ばんなそかな！　　皆さんは知っているでしょうか。トリックシリーズではお馴染みのギャグ（？）なんですよ。
実は、何時間目かは作者も忘れましたが、トリックネタをやっています。映画の事を書いたと思います。宣伝みたいなネタでした（^^）お暇なときに、時間つぶしにはなると思うので、是非探してみて下さいね～。　時間つぶしにならなかったら、スミマセンm（_　_）m

２９時間目【海水浴場／５】

青い空、白い雲、そして、人がイッパイのビーチ。

「美味しかったな。さすが、ＴＶで紹介された事がある店だ：拓真」

「そのＴＶ見たよ！レポーターは、ホントは姉妹じゃないのに姉妹って芸名に付いてる某有名人：翔太」

「キレイだよね～：雫」

「私はそのＴＶ見てない。東京テレビの、秋葉原ステーション見てたしね♪：梓」

昼食を食べ終えた四人は、テントに向けて歩いてる。

「……ん？：拓真」

「普段はお姉さんを凝視してニヤニヤしてるお兄ちゃんが、突然真剣な顔をしてどうしたの？：翔太」

「前半はいらないよね。てか、お姉さんを凝視してニヤニヤしてるんじゃなくて、胸を見てニヤニヤしてんだよ：拓真」

「…（Θ д Θ）：雫」

「このド変態野郎！：梓」

（（（（∪（、ｏ、∩）

「アァァァーー！：拓真」

拓真は大事なトコロを思い切り殴られたので、病院へ直行となった。

♪

海の家森林浴。

来年の夏、この店名を誰かが付けそうな感じがしてきた。そんな事を思ってると、店内から三人の女性が出て来た。

「次は何処の居酒屋に行く？暑いし早く決めて～」

「アハハ、居酒屋じゃなくて海の家だし（笑）」

「涼子？先にそこの海の家で飲んどくよ～」

ハイペースでお酒を飲んだ三人は、次の店へと足を運ぶ。最早、彼女達が海水浴場に来た理由等どうでもいい。

涼子は、海の家森林浴のカウンターで、キム兄と高校生三人とで話をしていた。

「何かゴメンね…。折角集まってもらったのに、打ち壊して…」

涼子は海の方を向いて、しょんぼりとしていた。

「元気だしなよ！また今度、集まればいーじゃん」

キム兄は優しく、涼子を励ます。

「うん…。だけど、今日という日は二度と来ないから淋しくて…」

涼子の瞳は、ウルウルしていた。

「…泣かないでよ。コレを飲んで、元気出そう」

キム兄は、グラスを涼子に向ける。

「ハハ、年下の貴方に慰められるなんてね」

グラスを受け取り、キム兄を見て笑う。

『乾杯ーー』

♪

夕方になり、帰る時間になった。皆疲れたのか、とても眠そうだ。

「楽しかったねぇ～。海って最高だ！」

ゴーグルを頭に付けたままの翔太。

「日焼けとか気にしてたら、楽しめないよね」

浮輪の空気を抜いている雫。

「全然泳いでないよ…」

一人落胆する祐介。

「カリカリ君買ってあげるから、元気だして」

財布を取り出す梓。

「気分悪い。お酒飲み過ぎたかも」

お腹を擦る涼子。

太陽と空が真っ赤に染まっているのを見た時、バスは動きだした。

３０時間目【蚊】

日は沈み、お月様が姿を現わした空を見上げ、スイカを食べている翔太君。

「スイカ美味しい♪やっぱ夏はコレだよね」

彼はスイカが大好きすぎて、自分がスイカになった夢を見た事がある。

「翔太、虫除けスプレーかけた？蚊は子供の血が好きだから、気を付けなよ」

下着姿の涼子は、ＴＶを見ながら一人淋しく晩酌をしていた。

拓真を誘ったのだが、大事なトコロを思い切り殴られたショックで、彼女に甘えに行ったようだ。

因みに大事なトコロとは、顔である。

「寝るまえにスプレーかけるよ！それと、蚊取線香も忘れちゃイケない！」

本日三個目のスイカを平らげた翔太は、内輪を仰ぐ。そして、四個目のスイカを食べるために涼子を見つめた。

「…そんなに見つめられても、四個目は駄目だから。さっさと歯磨きして、寝なさい」

母親のかわりに仕付けをしっかりこなす涼子は、愛川家の大黒柱的存在。

「四個目駄目なの？食べたい！食べたい！食べたい！食べたい！食べたい！」

翔太は、手足をバタバタさせて駄々をこねた。

「言う事を聞かない悪い子には、二度とスイカを買ってあげません」

コレが決め手となり、

「お姉様スミマセンでしたm（__）m翔太は、さっさと眠りに尽きます！」

翔太は負けた…。

「ハハ…買った。さすが私！昔から、子供にも容赦無い大人気ないヤツって言われてたしね」

ソファーの回りには、空缶が散乱していた。

♪

翔太はもう寝たかなぁ？と思ったが目をパッチリ開けている。どうやら、ヤツが原因で寝れないようだ。

ブーン…ブーン…

「何で奴等は耳元でブンブンするんだ？ひょっとして、耳の穴に何かあると思ってんのかな？」

ブーン…ブーン…

「そーいえば、虫除けスプレーかけるの忘れてたよ。蚊取線香も…。今から取りに行ったら、まだ起きてるの？って言われそうだし…どうしよう（？__？）」

ブーン…ブーン…

「てか、蚊は子供の血が好きなのかなぁ？確か、O型の血液の人が好きだったと思うんだけど。それと、黒色は動物に見えるんだった

かなぁ～」

ブーン…ブーン…

「…寝れないよ。ブンブンがとても耳障りだよ。仕方ない、このままじゃ寝れないし奴等をやっつけよう！人間ＶＳ蚊の始まりだ！」

ブーン…ブーン…

３１時間目【自由研究／前編】

イキナリですが、夏休みもあと少しでゴザイマス！　いつのまにか、お盆が終わってたりします。
僕は、読書感想文と自由研究の宿題がまだ終わってません！今日は、自由研究をしようと思いますが…何の研究をしたらいいのか全く分からないので、皆さんが僕の代わりに考えてくれませんか？

「お礼はします！」

だから、お願いします。
小説では伝わりにくいですが、僕は今土下座をして皆さんに頼んでいます！
膝を、額を、指を地面に付けまくってます！

「では、考えてくれました自由研究をここにお送り下さいませ（＊＾＿＾＊）」

郵便番号：ＡＢＣ－ＤＥＦＧ。
住所：東京都渋谷区天上天下町３番地。
電話番号：０７２－○○○－△△△△。

「締切は夏休みが終わるまでなので、ゆっくり考えて下さいね～。
皆様からのご応募、お待ちしてまーす」

（つ、＜、）＝つ）、д゜）

「コラ翔太、読者様に頼らないの！土下座して謝りまくりなさい！」
真っ昼間から酒を飲みまくりの涼子は、土下座しまくりの翔太の頭を押さえまくった。
「スミマセンでした。どうか、お許し下さいませ」

♪

読者を頼りにしていた翔太は、頭を抱えていた。
「今から何かの観察をするのは、遅いよなぁ～。ん～…どうしよう（＊＿＊）」
涼子は、ルールル・ルルルルールル・ルルルルールルールルールルーと、オープニングでかかる長寿番組を見ているので、当てにできない。

「…自分の力で頑張ろう」
そう呟き、何か飲み物がないか冷蔵庫を開けた。
「野菜ジュースあるかなぁ～。…ん？コレは？」
翔太の視界に卵が映った。
「コレだぁーー～！」
そして、雄たけびを上げた。

「ちょっと静かにしてよ。徹ちゃんの声が聞こえないじゃない！」
「てっちゃんって…。友達でもないのにそんな言い方、失礼じゃないの？」
「何で失礼なのよ？私と徹ちゃんは、何でも話せる仲なのよ」
「酔っ払ってるの？」
「信じてないわね～。私はこの前、ゲストとして徹っちゃんに呼ば

れたの！」
「…酔っ払いは、相手にしない方がいいね」
《ルールル・ルルルルールル・ルルルルールルールルールー》
そーいえば、エンディングでもかかるんだった。

32時間目【自由研究／後編】

酔っ払いは、相手にしない方がいいねって言ったけど、お姉ちゃんにアレがある場所聞かないとイケないんだった―＊ﾉ Д ﾉ”―
酒臭いし、飲酒中のお姉ちゃんには関わりたくないけど…自由研究の為だ！

「あの～、ちょっといい？聞きたい事があるんだけど…」
翔太は、恐る恐る姉に近付きながら聞く。

「ん？静かにしてよ～。今度は、まこっちゃんのはぐれてる刑事のドラマ見てるんだからさ～」
そんな彼女の右手には、いつのまにかワインボトルがある。

（ヤバい…早くアレがどこにあるのか、お姉ちゃんに聞き出さなきゃ！）

※
涼子は、ワインを一滴でも飲むと手が付けられなくなる。なので、ワインは買わない事にしているんだが…あのワインボトルは、何処に隠してたんだ？

「あのさ！僕アレに協力するから、早く持ってきてくれない？」
アレとは、翔太が冷蔵庫で卵を見た時何かを思いついた事と、何か関係しているのか？

「…ホントに？アレに協力してくれるのね！」
すると涼子は、急いでお酒やおつまみを片付けて、自室へ全速力で走った。

「ちょろいな…。トコロで皆さんは、僕が何の自由研究をしようとしているのか分かりましたか？わからない～と、お嘆きの読者様の為にヒントを出します！」

〈穴埋め問題ですよ〉
た○○っちの自由研究。

ヒントは、卵。

「もう分かりましたよね？それでは、声に出して答えを言ってみましょ～♪」

せーの、

た○○っち～（@｀∇｀@）／

♪

ドタバタと、騒がしい音が二階からリビングへ近付いてくる。この音は、階段を下りる音だ。

ドタバタドタバタ（＊γ＊）

「お姉ちゃんって、マナー悪いトコロとだらしないトコロを直して

くれたら、最高なんだけどなぁ」
その言葉を、姉の目の前では言わないように！
撲殺バット　エスカリボルグで、殴られるかもしれないからさ。

ドタバタドタバタ（＊γ＊）

「家の階段って、こんなに長かったっけ？」

ガチャッーー

「さて！早速やるわよ、たむらっち＼（＾Ｏ＾）／」

〈正解〉
たむらっち。

たまごっちと思った人は、ドンマイケルって事で。

32時間目【自由研究／後編】（後書き）

撲殺バット　エスカリボルグ。皆さんは知っているでしょうか？

ぴぴるぴるぴるぴぴるぴ～♪でお馴染みの、撲殺天使ドクロちゃんでててくるアイテムです。　作者のおかゆさんは、ギャグセンスが凄い！　僕が尊敬する先生の一人です。

33時間目【たむらっち／1】

たむらっちとは、涼子の会社の新製品である。
このおもちゃはたまご〇ちと同じ大きさ・同じ重さで、たまご〇ちをとても意識している製品だ。
だが、たまご〇ちとは全然違うーー

「ナニナニ…」
翔太は、取扱説明書を音読している。

〈たむらっちって何？〉
たむらっちとは、自分の子供を自由に育てる育成ゲームです。

〈たむらっちの遊び方！〉１：先ずは、貴方のプロフィールを入力して下さい。２：そして、職業を１０秒以内に決めて下さい。もし時間切れになった時は、ニート・フリーター・ホームレス・犯罪者のどれかになってしまいます。
３：職業が決まったら、入社試験を受けて下さい。
４：もし落ちてしまったら主人公はグレて、ニート・フリーター・ホームレス・犯罪者のどれかになってしまいます。
５：入社試験に受かると、翌日から新入社員として働きます。そしてココで一言、
「自由だぁ～！」
と拳を振り上げながら叫びましょう。
６：ここまで進んだら、取扱説明書その２を見て下さいね。

たむらっちの取扱説明書を音読していた翔太は、

「たむらっちとは、自分の子供を自由に育てる育成ゲームじゃないの？」
と涼子に聞いた。
涼子は、いつもよりニコニコしながら答える。
「ゲームスタートよ♪」

♪
スタートボタンを押すと、画面に
「たむらっち」
という文字が出た。

たむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっちたむらっち

ＬＯＡＤ　ＧＡＭＥ）
ＮＥＷ　ＧＡＭＥ　）↑

「たむらっちの文字多すぎだよ！目が痛い…（＊＿＊）」
「ＮＥＷ　ＧＡＭＥ）をサッサと押しなさい！」
「何で片仮名が半角に？」
そして翔太は、適当にプロフィールを入力した。
すると、

１０……９……８……７……６……５……４……

いきなりカウントダウンが始まった（（（；゜Д゜）））

「わわっ！早く職業書かなきゃ、ニート・フリーター・ホームレス・犯罪者のどれかになってしまう！」

慌てた翔太が書いた職業は……。

――――――なりたい職業は？

【教師】

「ふ～ん。翔太は、教師になりたいんだ？」

涼子は、いつもよりニコニコしながら言う。

「グレートティーチャーな作品を見て、教師って職業は良いなって思ったんだ」

翔太は、少し顔が赤くなっていた。

「反町がドラマやってたアレね？確かアニメもやってたわね～」

「さっ！入社（？）試験に挑戦だｏ（＾－＾）ｏ」

33時間目【たむらっち／1】（後書き）

誤字があったので修正のため削除して、もう一度載せました。ご迷惑をおかけしましたm（＿）m　撲殺バットエスカリボルグとは、ドクロちゃんでてくるアイテムです。

34時間目【たむらっち／2】

無事に職業が決まって、ホッと一息ついていると。

《ピロピロン…ピロピロン…》という音が鳴った。

「たむらっちが呼んでるから、スイカは後回しよ」

「まだ一口しか食べてないのに～（~ ε~）」

〈入社試験が始まります〉

、（、Д、；≡；、Д、）丿

ソワソワしているキム・ニールヤングは、試験官から注意されてしまう。

「キム・ニールヤング～、何こんな時にソワソワしてんだぁ（「□ー；）！！」

「そんな名前にしたんだ？」

〈問1〉

教師と生徒が禁断の愛に向かおうとしている時、貴方の妻が目の前に現われました。さて、貴方はこのピンチをどうやって切り抜けますか？

入社（？）試験だからどんな問題があるんだろう？とドキドキしていた翔太は、

「コレって小学生が答える事じゃないよね？」
と涼子を見据える。
この事に対し涼子は、
「心配しなくても大丈夫よ。この作品はフィクションで、実在の人物・団体・事件などには、いっさい関係ありませんから」
「…そうじゃなくってさ」

この後も、子供に悪影響の問題は続いたーー

〈問2〉
貴方は新任教師の鈴木先生に恋をしました。しかし、鈴木先生は貴方のお姉様。そこで貴方がとった行動は？

〈問3〉
学園で一番可愛い美香が大好きな貴方は、明日告ろう！と決心しました。しかし、家に帰るとそこには美香がいました。何と、父が再婚した相手は美香のお母さんだったのです！
家族になってしまった美香に、貴方は告白できますか？

十分後ーー

〈結果発表！〉
果たして、キム・ニールヤングは教師になれるの？

「…たむらっちって、ホントに全年齢対象商品なのかなぁ？間違ってるよね」
涼子に聞こえないように呟くと、翔太は方向キーを下に押した。
「合格発表か～、コレってワクワクするよね」
普通、ドキ×２だけどね。

〈貴方の番号↓４６４９〉
１・２・３・４・５・６・７・８・９・１０・１１・１２・１３・４６４８

「１４～４６４７番の人落ちたのか～。キム・ニールヤングは大丈夫かなぁ（・・？）」
翔太の右手は、プルプルと震えていた。
「心配しなくても大丈夫よ。この作品はフィクションで、実在の人物・団体・事件などには、いっさい関係ありませんから」
緊張の瞬間を打ち壊した涼子は、ニコニコしていた。

〈貴方の番号↓４６４９〉
９・１０・１１・１２・１３・４６４８・４６４９・４６５０・４６５１・４６５２

「受かったね」
「もっと喜びなさいよ。ヤッター！とかワーイ！とか叫んでさぁ」
「たむらっち疲れるから、もう二度としないよ。自由研究は、また考えるよ」

「何ですって？」
今日はずっとニコニコしていた涼子が、バイオ〇ザードのゾンビみ

たいな顔に豹変した。

「ちょっ、お姉ちゃん！顔怖いよ！」

怯えている翔太。

「もう愛想笑いなんてしないわ……」

そう呟いた後、ワインを一気に飲み干して手が付けられなくなった。

３４時間目【たむらっち／２】（後書き）

キム・ニールヤング、皆さんは知っていますか？　バラエティー番組のキャラクターなんですよ。
それでは、３５時間目を待っていて下さいね（＊^＿^＊）

３５時間目【クロワッサン】（前書き）

今回は、久しぶりの登場のクロワッサンが主役！　それでは、お楽しみ下さいませ＼（＾Ｏ＾）／

35時間目【クロワッサン】

ワンワンワン！ワンワンワン！ワンワンワン！

全身黒色のミニチュアダックスフンドが、コッチに向かって吠えていた。

ワンワンワン！ワンワンワン！ワンワンワン！

何か言っているようだが犬語は分からないので、和訳してみる事にした。

ーーーー

皆さん、お早うございます！爽やかな朝は気持ちが良いですよね。

あっ、お久しぶりです（o≧ω≦o）

愛川家のマスコット的存在の、ミニチュアダックスフンドのクロワッサン（♂）だお。

今日は皆さんに、華麗なる僕の一日を見てほしいんだ。今日一日、ヨロシクお願いしますm（__）m

♪

ダラダラ書くのも面倒臭いので、クロワッサンの華麗なる一日を、箇条書きで書いてみたーー。

―早朝―
・寝室(タンス)から遠吠えが聞こえた。
・数分後、涼子が鬼のような顔でやってきた。
・クロワッサンは、汗を流しその場から離れた。
・翔太を頼りに、階段を上る。
・しかし、こんな時間に翔太は起きていないという事を思い出し、溜息を吐きながら引き返した。
・階段を下りたトコロにいたのは、鬼のような顔をした涼子だった。
・クロワッサンは身の危険を感じ、外へ逃げた。

―朝―
・お腹がグゥォ～と鳴りだした。
・仕方ないから、犬好きで有名なトミお婆さんの家に、よだれを垂らしながら向かう事にした。

―お昼―
・お腹がグゥォ～と鳴りだした。
・そーいえば、翔太君は僕がいないから寂しがってるかなぁ？と思いながら、犬好きで有名なトミお婆さんの家に、よだれを垂らしながら向かう事にした。

―夕方―
・お腹がグゥォ～と鳴りだした。
・そーいえば、そろそろ三時のオヤツだな～♪と思いながらスキップしているクロワッサンは、犬好きで有名なトミお婆さんの家に、よだれを垂らしながら向かう事にした。

ーーーー

ワンワンワン！ワンワンワン！ワンワンワン！

全身黒色のミニチュアダックスフンドが、コッチに向かって吠えていた。

ワンワンワン！ワンワンワン！ワンワンワン！

そろそろ35時間目も終わるので、和訳してみる事にした。

ーーーー

勘違いしないで下さいね！僕の一日は、トミお婆さんの家に行く事じゃないですから（笑）

今日はたまたま、運が悪かっただけなんですよ。また今度、華麗なる一日を見てほしいんだお（＾ω＾）

では、時間になりましたので皆さんとはお別れです！

えっ？まだ話す事沢山あるから待って下さいよ～！

また暫く出番ないかもしれないですし、もう少しーー

３６時間目【ＡＦＳＰ】

夏休みの宿題が沢山残っています！アト少しで夏休み終わるのにどうしよう？
……って悩んでる時間は無いよね！だから、さっさと朝ご飯を食べて宿題をやりましょうｏ（＾－＾）ｏ

「ハァァ（≧д≦＊）」
目を擦り欠伸をしながら階段を下りて、朝ご飯を食べようとリビングにやってきた僕に、突然姉は言いやがった。

「あっ翔太、お早よう。突然だけど、今日から旅行に行ってくるから」
そう言って、荷物を持って立ち上がろうとした。
「ちょっと待ってよ！そんなの急すぎるよ。食事とか、掃除とか誰がするの？僕とお兄ちゃんは、全くできないんだけど……」
姉がしばらくいないので、不安になる翔太。
「そう言うと思って、私の代わりになる人達を呼んどいたのよ♪」
涼子は、ニヤリと笑いながら言った。

その時、
〈ピンポーン〉
涼子の代わりになる人達がやってきた。

そして、ガチャッという音とが聞こえて、幾つもの足音が廊下に響いた。

「人達って言うことは、ひょっとして……（＝＿＝）」
とても嫌な予感を感じていたら、ゾロゾロとリビングに、スーツにグラサンという格好をした人達が入ってきた。この人達は、愛川家の人間を護衛する為だけに結成された組織、ＡＦＳＰ（Ａｉｋａｗａ Ｆａｍｉｌｙ Ｓｅｃｕｒｉｔｙ Ｐｏｌｉｃｅ）である。
「嫌な予感は、何故か当たるんだよね（泣）」
翔太は頭を抱えていた。
「って言うことで、皆さん翔太と拓真をヨロシクね♪それじゃ、私は南の島で日頃の疲れをとってくるわね～（＊＾▽＾）」
そう言うと、ルンルンと鼻歌を歌って出ていった。

「……日頃疲れてるの？合コンしてるだけなのに」
姉の姿が見えなくなった瞬間、毒舌になる翔太。

♪
朝ご飯はカップラーメンでいいやぁ～と思いお湯を沸かそうとしたら、
『翔太様！そのような栄養が偏ったモノを食べてはイケません！今直ぐ、考え直して下さいませ』
ＡＦＳＰの人達が、声を揃えて僕に注意した。
「……そう、栄養がね。じゃあ、コンビニで何か買ってくるよ」
僕はそう言い、私服に着替える為自室へ行こうとしたら、
『翔太様！そのような事はお止め下さい。コンビニで売っているお弁当は、塩分が高いと聞いたことがあります。なので、お止め下さ

いませ』

「……そう、塩分がね。じゃあ、外食するよ」

今度こそ僕は私服に着替える為、自室へ行こうとしたら、

『翔太様！そのような所に小学生の子供が一人で行ってはイケません！昨今日本は、罪もない子供を狙った悪質な事件が頻繁に起こっていると聞きます。なので、翔太様を一人で行かせる訳にはいきません！私達も御同行させて頂けたなら、外食は許可しましょう』

「……頭痛い（。ー｜ー。）」

翔太はこの後お昼まで寝て、夜中まで宿題を頑張ったらしい。

３７時間目【絆】

今年もやってきました！
“愛は地球を助ける”でお馴染みの２４時間テレビが！

「今年のテーマは『絆』だよね。因みに英語で絆は……絆は……アレ？何だったっけ？思い出せないよ！」
と何故か自分で己を混乱させている、英語が苦手なアメリカ育ちの翔太。
『英語で絆は、ｂｏｎｄ（バンド／ボンド）と言います』
ＡＦＳＰの皆さんは、声を揃えて言った。
「……そうだよね。簡単すぎて度忘れしちゃったよ」
英語の事になると、むきになるアメリカ育ちの翔太。『忘れちゃイケませんよ。この世の中、英語を使いこなせないと取り残されてしまいます。なので、今からでも駅前留学に行きましょう！勿論、お供します』
ＡＦＳＰの皆さんは、テーブルの上にパンフレットを並べ始めた。
しかし、
「今日は、２４時間テレビを見て『絆』とは何かを学から静かにしてね」
英語の話題は、２４時間テレビには勝てなかった。

♪

リビングでは、翔太と十人のＡＦＳＰが２４時間テレビを見ていた。
「わっ！マラソンまだ始まったばっかりなのに、もうバテてるよゞ（。□。）ノ」
テレビの右下には武道館まで９９ｋｍと書いている。

『……翔太様？絆の事を学びたいのなら、ＴＶを見なくても学べますよ』
そう言って、ＡＦＳＰの一人がＴＶの電源を消した。
「ちょっと！なんで消すのｏ（＜＾＞）ｏ」
リモコンへと手を伸ばす。しかし、ＡＦＳＰの一人がリモコンを持っていた。
『私達で絆とは何かを話し合いましょう！なので、ＴＶなど不必要！』

（つ▼∀▼）＝つ

ＴＶの画面は、蜘蛛の巣状にヒビが入った。
さすが、ＡＦＳＰ（Ａｉｋａｗａ　Ｆａｍｉｌｙ　Ｓｅｃｕｒｉｔｙ　Ｐｏｌｉｃｅ）。

♪
ＡＦＳＰに囲まれた翔太は、
「なんだろう？この暑苦しさは……」
と心の中で思った。

『さあ！早速始めましょう、夜通し話しましょう』
相変わらず声を揃えて喋るＡＦＳＰ。お前達は一心同体なのかとツッコミたくなる。
「夜通しは嫌だよ。よい子だから早く寝ないとイケないしね～」
大きな欠伸を一つして目を数回擦り、暑苦しい護衛に眠たい事をアピールする。『そんな下手な演技を演じても、私達には全てお見通しです。さあ！四の五の言わずに話しますよ！』

Q、貴方は絆とは何だと思いますか？

「ん～……怪我をしたら友達が、大丈夫？って心配してくれる事かなぁ～」

他にはありますか？

「他？……あっ！喧嘩しちゃったけど、次の日には仲良くなっている事！」

他にはありますか？

「ちょっと待ってね！……財布を盗ったのは僕じゃないのに何故か犯人にされて、友達が必死に僕を守ってくれる事！」

この後、夜通し絆とは何かを考えた翔太とＡＦＳＰ。結局答えは見つからなかったけど、何か得たモノはあったと思う。
テレビで『絆』とは何かを学のも良いけど、家族や友達と一緒に考えるのも良いかもしれませんね。
それでは今回はこの辺でお別れしましょう（＾Ｑ＾）／＾

３７時間目【絆】（後書き）

たまには真剣な話もやった方が良いんじゃないのかなぁ？って思い書きました。次回からしばらくハイテンションですので、ヨロシクお願いします（＾Ｏ＾）／　また真剣な話があった時は、読んで下さいね♪

38時間目【ハーン】

今日は何日？まだ２０日ぐらだと思うんだけどね～。

「えっ？……３１日？」

カレンダーの前で、氷のごとく固まる翔太。

「宿題まだ残ってるよ！どうしよう……」

あたふたしている少年。

その時、

〈ピーンポーン〉

「忙しいのに、誰？」

翔太は玄関へと向かう。

〈ガチャッ〉

『ただいまでコザイマス、ご主人様。隣町まで、買い物に行っていましたの』

ソコにはＡＦＳＰがいた。彼らは何故か、メイドの格好をしている……。正直ひくよ！変態だと勘違いするよ！

「……その格好、メイドさん？」

呆れた顔をしている翔太は、目を細めている。

『萌え萌えですよね』

〈ガチャッ〉

ドアを閉めた翔太は。こんな事をしている暇は僕にはない！今は一秒でも時間が惜しいから、一秒でも時間を無駄にできないんだ！あんな変人達と関わってるより、早く計算ドリルをやらないとｏ≧▽。）

と心の中で思っている。

〈ピーンポーン×∞〉

「ウルサイから、萌え萌え（？）なメイドさん達を家に入れよう」

〈ガチャッ〉

『熱いなぁ　。。τ（■皿■）』ソコには、腰を落として煙草を吸っている萌え萌えなメイドさん達がいた。

「閉めようかなぁ？」

翔太はそう思ったが萌え萌え（？）なメイドさん達の中に、何故かメイドさんの格好をした雫がいた。

「煙草は体に毒なのよ！煙草の点火部から立ち上るけむりの副流煙は、煙草を吸う人が吸い込む煙の主流煙よりも有害な物質が多く含まれているのよ！」

雫は、とても分かりやすい説明でＡＦＳＰを驚かせる。

『分かりました、お嬢様』彼女達（？）はお嬢様に頭を下げて、喫煙する事を決心したのだった。
「……図書館で宿題した方が、はかどるかも（ー＿ー）」

♪

ＡＦＳＰの皆さんは、
『あらま、牛乳を買い忘れましたわ～。急いで買いに行かなくてはなりません』僕を気遣ったのだろうか、そう言うと全速力で走った。
棒読みだったけど、僕と雫ちゃんを二人きりにしてくれたんだから、感謝しなくちゃイケないね！
有難うゴザイマス（＾Ｏ＾）／

「翔太君！ぼーっとしてる時間はないだっちゃ」

だっちゃ……？

「今日で夏休み終わりなんだから急いでやらないと！さぁ、早くだっちゃ」

この作品有名だよね。

「ココとココが分からないんだ～。っていうか、苦手なんだよね」
翔太は、【元の襲来とその影響】が苦手だ。
何が苦手かというと、チンギス＝ハーンとフビライ＝ハーンである。
二人の名前がとても似ていて、どっちがチンギスでどっちがフビライか分からなくなる。
それと、授業で習う前はハーンじゃなくてハンだと思っていたらしい。

「私は、平氏の繁栄の平氏専制を示す平時忠の言った言葉が苦手だなぁ～」
雫は日本史が大好き。なので、雫の前では日本史の事を話さない方がいい。
「それより、チンギス＝ハーンとフビライ＝ハーンの違いを教えてよ！」
時間が無くて慌てている。
「朝鮮半島南部での立場を有利にするために中国王朝に朝貢した倭国王は良いわね♪総称して倭の五王。個別には、讃・珍・済・興・武」
誰か雫を止めてくれ！彼女はこんなキャラじゃなかったぞ。夏休みに遊びすぎたのかなぁ？
「確かチンギス＝ハーンの孫が、フビライ＝ハーンだったような……」
頭を抱えて悩んでいる翔太。てか、小学校で習わないと思うんだけど。
「それとね～、中臣鎌足があんな事をしたのはーー」
翔太が徹夜で宿題を頑張ったのは、言うまでもない。

３８時間目【ハーン】（後書き）

今回は、ある意味マニアックでした（笑）作者は歴史が苦手なので、書くのに苦労しました（ｏ＾ｏ＾ｏ）　それと、サブタイトルは悩みましたね～。【宿題】にしようか【３１】にしようか……まぁ結局【ハーン】にしましたが！　次回から二学期がスタートです。これからもＢｏｙ　Ｍｅｅｔｓ　Ｇｉｒｌをよろしくお願いします！それではまたお会いしましょう（＾Ｏ＾）／

39時間目【二学期】

歯も磨いて、顔も洗って、ついでにお風呂にも入ったから、そろそろ雫ちゃんを向かえにいこうかなぁ。

「じゃあ僕は学校に行ってくるね～（＾Ｏ＾）／」

僕は元気な声で言った。

どれぐらい元気かと言うと、アントニオの物真似をしている人ぐらい元気。

『お待ち下さい！護衛である私達と一緒に行動しないと、翔太様の命が危険です。なので、もう少しお待ち下さい。賞味期限がきれた卵を食べてしまい、お腹が痛いのです』

ＡＦＳＰは、廊下に行列をつくっていた。

「何で行列ができるんだろう？僕の家には法律相談所なんてないのに」

と思った翔太だが、ＡＦＳＰにあまり関わりたくなかったので、足早に歩き玄関へ向かった。

♪

僕と雫ちゃんは、二人で登校している。

「翔太君少し日焼けしてるね。私も少し焼けてるんだ～」

そう言いながら、雫ちゃんは胸元を見せてくる。

「夏の思い出だよね！」

ヤバい……ドキドキする。どれぐらいドキドキかと言うと、数子によって改名させられるお笑い芸人ぐらいドキドキ。

「そーいえば、翔太君は自由研究何やったの？私は、猫の気持ちを知ることができたよ」
そう言いながら、雫ちゃんは携帯を見せてくる。
「……猫耳つけてるね」
画面には、猫耳をつけた雫と１０匹の猫が映っていた。
「可愛いでしょ？猫」
ムービーも見せてくる。
「うん。可愛いよ」
雫ちゃんの方がねーー。

♪

学校に着いた僕と雫ちゃんは、早く教室に行きたいから走った。
「コラ！廊下は走っちゃイケません（「□」；）！！」
って横から聞こえてきたけど、無視無視。
だって、早く教室に行きたいんだもん！

『おはよ～＼（＾Ｏ＾）／』
教室に入った瞬間、皆は元気良く朝のあいさつ。
「おはよ～。皆真っ黒だね！遊びすぎだよ！」
そう僕は言う。
どれぐらい真っ黒かと言うと、みのもんたと松崎しげるを足したぐらい真っ黒。
「翔太君。座ろ（＾ー＾）」

「そうだね。荷物重いし」
僕と雫ちゃんは自分の席に座る。そして、机の上に計算ドリル・日記のノート・半紙等を置いた。
「そーいえば、何で走って教室にきたの？」
雫ちゃんが突然早く教室に行きたいって言って走ったから、何で早く教室に行きたいのか理由を聞けなかったんだ。
「えっ。翔太君、ひょっとして知らないの？」
「……何が？」
「転校生が来るんだよ」
「そうなんだ……」
「松下先生に聞いたんだけど、アメリカから来たらしいよ」
「アメリカからね～」

その時、
〈ガチャッ！〉
勢い良くドアが開いた。

「皆久しぶり～。夏休みは遊びまくったかぁ～（＾Ｏ＾）先生なんて、夜遊びしすぎて警察にお世話になっちゃったよ～。そんで、お腹空いたんだけどって言ったら、カツ丼じゃなくて親子丼がでてきたよ～。アハハハ腹イテ～（≧д≦＊）」
ハイテンションな松下先生は、何故かアロハシャツを着ている。学校まで着てくるとは……。

「せんせー転校生は？」
「英語教えてくれるかな」
「ハロ～ハロ～」
ガヤガヤと騒がしい、５年１組のがきんちょ達。

「ガヤガヤうるさいわよ。静かにしなさいね（＾ε＾）」
松下先生は、近くにいた男子生徒にキスをしようとした。男子生徒は、あからさまに嫌そうな顔をした。
「アンタ勘違いしないでよ～。私はアンタの事なんて、眼中にないんだから」
男子生徒は、僕もお前なんか眼中にないよと思った。

「何でキレないのかな？」
「一皮むけたんだよ」
小声で話す翔太と雫。

「んじゃ、転校生さっさと入ってきて～。因みに、アナタも眼中にないよ」

そして転校生が教室に入ってきたーーーー

『皆様、本日から私達１０人の兄弟をよろしくお願いします。小学校は数十年前……イヤ、日本の小学校は初めてなので分からないトコロが多々あるので、優しく教えてくださいね』

スーツにサングラスという、どこかで見たような感じがする１０人の男の子が、５年１組の仲間に加わった。

「翔太君。転校生、ヤクザみたいだね（＊＾▽＾）」
何で雫は笑うんだろう？普通泣くよね。
「ぐすっ……」
翔太のようにさ。

４０時間目【保健室】

奴等のせいで頭に激痛が走った翔太は、保健委員と一緒に保健室へと急ぐ。

「大丈夫？おんぶできないかもしれないけど、保健委員として頑張ろうか？」

彼は、５－１で一番背が低い。ニックネームはミクロマンだ。本名は知らない。

「大丈夫だよ。おんぶできないかもしれないって分かっていながら、保健委員として役目を果たそうとする君の熱意は伝わったよ」

こんな事言ってるけど、正直辛いんだよね（ ―｜―）

【保健室】

二人の視界に、保健室と書かれた真っ白なプレートが入る。翔太は早くベッドで寝たいので、歩を早める。そして、保健室のドアを開けようと手を伸ばした。

その時、後ろへ引っ張られた。

「保健の先生には気を付けてね。下手すると、病状が悪化するからさ」

ミクロマンの目は真剣だ。でも、彼の言ってる事はよくわからない。何で下手すると病状が悪化するんだろう？

「うん、気を付けるよ。ありがとうね（＾―＾）」

〈ガチャッ〉

「……無事を祈ろう」
ミクロマンは、呟いた。

♪
天上天下小学校の保健室に入ったのは初めての翔太は、あたりをキョロキョロ見回している。

「保健の先生……いないなぁ」

そう思いながら目線を前にすると、カーテンを閉めているベッドがあった。ひょっとしと保健の先生は寝てるのかなぁ？と思い、カーテンを開ける。そこには、

「ｚｚ……ｚｚ……」

白衣の格好でスヤスヤと寝息をたてて眠っている保健の先生がいた。

「どうしよう（？＿？）」
保健の先生を、起こすか起こさないべきかを悩んでいる。私は起こした方が良いと思うよ、だって君は頭が痛いんだから授業中に保健室へ来たわけでしょ？だから、保健の先生を起こして悪いところを見てもらった方が良いんじゃないのかな？
「……そーだね」

「ｚｚ……ｚｚ……」
起きる気配が全く無い保健の先生は寝返りを打った。
「せんせー！起きて下さーい（ノ≧≦▽≦≧）ノ」
頭が痛いのを忘れて騒ぎだす。

「ん……？」

起キタ――（ °∀ °）――！！！！！！

「あら、患者？ゴメンね、昨日ナースのお仕事の観月ありさの行動を見習おうとして、夜遅くまで録画したテープを見てメモっていたの。だから眠くて」
彼女は今年天上天下小学校に来た、土屋（ツチヤ）美央（ミオ）先生。年齢は分からないが、まだ２０代前半だろう。因みに、天上天下小学校人気先生ランキングで、一位に輝いた。

「新しい白衣に着替えるから、ちょっと待っててね」
美央先生はそう言うと、翔太の目の前で着替え始めた。

その時、
〈ガチャッ〉
擦り傷をつくった女子生徒が、泣きながら保健室に入ってきた。

しかしーーーー

「今着替えてるか、ソコに座って待っててね～」

美央先生の言葉は女子生徒の耳には入らず、翔太を見てイキナリ怒鳴った。

「えっちー（＜＿＞）」

そして、女子生徒は泣きながら走っていった。

翌日から翔太は、エロテロリストというあだ名になったのは仕方ないーー。

41時間目【国語／2】

―5年1組／四時間目・国語―［我々ハ宇宙人デアル　著者：セニョリータ加藤］

俺は毎日、お天気お姉さんの笑顔を楽しみにしていた。しかし突然、『番組の途中ですがニュースをお伝えします』と男性アナウンサーが言いやがった。下の方に、お天気お姉さんの猛烈お天気情報は中止となりました、と文字がでていた。

俺はお天気お姉さんに会えなくて叫んだ、

「どうせならアナウンサーもお姉さんにしてくれ！」

力のかぎり叫んだ。

仕方ないから、番組の途中ですがどんなニュースをお伝えするのか見ることにしようではないか。

『お天気お姉さんさんが、宇宙人に捕まりました』

……このアナウンサー何言ってんだ？馬鹿じゃないか？アホじゃないか？俺はそう思った。しかし（≧ω≦）

『ワレワレハ宇宙人デアル。地球ヲ侵略シニヤッテキタ！マズハコノ小娘のカ弱キ心ヲ侵略シテヤル！』

宇宙人は画面に映った。

しかも、宇宙人写メを撮られてる。しかも、写メを撮られて嬉しがってる。しかも、記念撮影はお一人様千円って書いてる。しかも、レディース割引してる。

「コレはヤラセなのか？」

だって、たまに映るスタッフの顔がニヤニヤしてるし。これはきっと、子供や若い世代をターゲットとしたイベントなんだ！コレ以外考えられない（＾・＾）ｂ

そう思った次の瞬間、

『ナニイ！？ヒルズＴＶの方がレインボーＴＶよりギャラが多いだと（「□」；）！！

よっしゃ。そんじゃヒルズＴＶに行きますか～』

信じれない映像が映る。

『つー事で、レインボーＴＶにはもう用はないからさ。バイバ～イ（＾Ｑ＾）／＾』

宇宙人は大きく口を開けた。そして、ドコからかカウントダウンをする渋い声が聞こえた。

３……２……１……

：＾ｏ＾）≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

口から放たれたのは破壊力抜群の光線だった。

「マジかよ……（＊＿＊）」

俺は唖然としていた。

そして何故か、破壊力抜群の光線はＴＶからでてきた。

ー謎の宇宙人によって、レインボーＴＶと俺を消してしまった。

果たして彼らは何が目的なんだろうか？

♪

松下先生が、黒板を思い切り叩いた（殴った）。

「いいかクソガキ共！面倒臭いから一度しか言わないので、よ～く聞きやがれ！凸（ー＿ー χ）」

何故か生徒達に喧嘩を売っている松下先生。

「……」

生徒達は息を凝らしている。

「よーし。じゃあ面倒臭いけど、言いますかぁ～」

「……」

生徒達は固唾を飲む。

「この作品は、セニョリータ加藤先生が見た夢を参考にして作ったらしいの。夢では、宇宙人は変人だったの。でも、小学生にあんな衝撃的なモノを想像してほしくないって事で書かなかったの。私は、小学生だからって差別してほしくないの。だから、宇宙人がどんな変人だったのかを皆考えてみて！時間ないから、考える時間は一分ね」

ーそして一分後ー

「時間ないから、五版のクソガキ達の解答を見てみましょう＊ー ∀

-）b」

Q. 宇宙人はどんな変人だと思いますか？

A.

・夜なのに朝マックを注文しようと思ってる（翔太）・人間は両生類だと思ってる（雫）

・三途の川を泳ぎたいって思ってる（祐介）

・コンドルのパンツがくいコンドルところを写真に収めたくて、コンドルを捜そうと思ってる（梓）

「よく出来ました（＾－＾）」

４２時間目【一発ギャグ】

餓死しそうなぐらいお腹を空かした子供達。
彼らの目の前には、今日の給食カレーがある。

「う～ん。今日の一発ギャグは、誰にしようかな？」
５－１では、給食を食べる前に一発ギャグのお披露目が催されている。

その時、雫が背筋を伸ばして右手をあげた。
「たまには先生がやって下さい。生徒ばかりに一発ギャグをやらせるのは、どうかと思うので」
雫は恐いもの知らずの、Ｂｏｙ　Ｍｅｅｔｓ　Ｇｉｒｌヒロインだ。
「わわわわかったワン。君達に私、松下結香の素晴らしい一発ギャグをお聞かせしましょう」
明らかに動揺している松下先生。心臓は、いつもより多めにドキドキしている。

（ドキドキドキドキドキドキドキドキ：ｂｙ　心臓）

ここで小さな声で、
「皆、防寒着と防寒具の準備はいいかい？」
実はいた学級委員長が一言。

「ちょっと待ってね！少し私に時間をくれないかな。発声練習とかしたいしさ」
彼女の右手には、何故かマイクがある。

ここで小さな声で、

「委員長！皆に言う前に私に言ってよね（「□」；）！！テメェーが事前に何も言わねーから、何の準備もしてないっつーの」
実はいた副委員長がツンツンしながら一言。

「愛してるって言いたいよ！痛いよ私のか弱い心！嘘つきなんて大嫌い！越後屋アイツはヒモなのよ！幼なじみは初恋の人（＜＿＞）」
発声練習（？）をしている松下先生。

ここで小さな声で、
「ゴメンよ。だって僕は、君と寄り添いたかったからさ……」
実はいた学級委員長が白い歯を見せ格好付けている。

「……ライオン貴方は猛獣よ。林檎は所詮ａｐｐｌｅよ。ルールなんて関係ないわよ。レモンがないならオカレモンがあるでしょ。ロビンソンってイギリスの有機科学者よ」
ラ行まで発声練習（？）をしている。

ここで小さな声で、
「さっきは怒ってゴメンね。事前に教えてくれたけど、最近何とかの森ってゲームにハマっててて、四六時中やってたら忘れちゃったみたい。アハハハｏ≧≦▽ ｏ）私ってだらしないよ～」
実はいた副委員長がデレデレしながら言った。

「ーーよし。発声練習も無事に終わったし、皆さんお待ちかねの一発ギャグをやりますかｏ（＾－＾）ｏ」
教卓の上に立ち、呼吸を整え、落ち着かせる。

（ドキドキドキドキドキドキドキ：ｂｙ　心臓）

「そーいえばお腹すいたわね。冷めない内に食べましょうか（^ー^）」

４２時間目【一発ギャグ】（後書き）

一発ギャグってサブタイトルなのに、ギャグをやってません（笑）
たまにサブタイトルを無視するのが、この作品の良いトコロであり悪いトコロでもあります。それと、一人称と三人称を混ぜてしまったＢｏｙ　Ｍｅｅｔｓ　Ｇｉｒｌ……実は最近この事に気付きました（遅っ！）

43時間目【晩餐会／1】

お昼時、店内ではいつものように奥様達が幾つかのグループに分かれて、お食事を楽しんでいます。
そんなここは、ファミリーレストラン晩餐会。
ファミリーなんて滅多に来ない事が、このレストランの唯一の自慢である。

その時、〈ウィーン〉という聞き飽きた音が聞こえ、お客様が入店した。
ホール担当の山田が
「いらっしゃいませー」
と、大きな声で言う。

お食事中の奥様達の視線は、入り口に集中していた。

次の瞬間、入店した客の姿を見て奥様達は驚き、ティーカップを次々と床へ落とした（損害三千円）。
入店したのは、なんとランドセルを背負った小学生！男の子が二人と女の子が二人、小学生のガキんちょ達が“奥様の壮絶な言い争いが行なわれているファミリーレストラン晩餐会”に、来てしまった（@_@;）
コレは開業以来前代未聞の大事件である！
晩餐会の外観は不気味な屋敷。それもそうだ、もとは古い洋館なのだから。
この洋館はお洒落なのに、何でファミリーレストランにしちゃったんだろうと思った時には、既に開店していたらしい。
子供達からは“お化け屋敷”と茶化されて、男達からは“修羅場”

と言われて、奥様達からは“戦場”と呼ばれているのが、ファミリーレストラン晩餐会なのだ。

そんな危険地帯に、何故四人のガキんちょはやってきたのだろう？
興味本位では済まされないって事わかってるのかな。

「ねえ。やっぱ帰ろうよ」
ふかふかのソファーに座りながら、翔太は言った。
「面白そうじゃない」
ニコニコ笑う雫。
「生きて帰れるかな？」
弱気な祐介。
「とりあえず、お子様ランチを食べましょう♪」
メイドさんの格好をしている梓。お気に入りらしい。

小学生が入店して、キッチンは騒ついていた。
「久しぶりのお子様だな。そーいえば日の丸の旗ってあったっけ？」
キッチン担当川田が、手を洗いながら言う。
「日の丸はないけど、リビアの国旗ならあるぞ」
ホールチーフの島田が、一箱の段ボールを持ちながら言う。
「リビアかよ……」
店長の上田がため息をつく。

その頃子供達は、奥様達の壮絶な言い争いを間近で見ていて、ここはまるで昼ドラのような世界だ！と、思っていた。

【歌舞伎町ＮＯ１ホスト、レイジを取り合う戦い】

「貴方達みたいなお金の無い人に、レイジは振り向かないわよ？」
そう言いながら、レイジに貰ったＨＥＲＭＥＳ（エルメス）のバッグを撫でている早乙女さん。
「あんたバカね。レイジはお金が目当てなのよ。そうやってブランドものを与えとけば、勘違いする馬鹿がいるかもしれないからね」
禁煙と書かれたプレートを無視してタバコを吸う久米田さん。

この二人が主に派閥争いをしている。

「はぁ？貴方何言ってるのよ。私は何回も愛してるって言われたし、何度も食事に行ってるのよ。一度も手に触れた事の無い貴方が、よくそんなに偉そうに言えるわね～（ー＿ー）」
早乙女さんは、レイジに貰ったＣＨＡＮＥＬ（シャネル）の二つ折り長財布を撫でている。
「チクショー早乙女さん。お金があるからって、レイジを独り占めにしやがって。悔しい……（＊＿＊）」
悔しいのに、何故かさんを付ける久米田さん。

「恐いよ！こんなの小学生が見るモノじゃないよ！」
お冷やのおかわり三回目の翔太が、目を瞑りながら言った。
「昼ドラだったら、嫁が出て来ないと盛り上がらないわね（＾ー＾）」
いつの間にかデジタルカメラで、奥様達を写真におさめる雫。
〈カシャッカシャッ〉
「あっ、隅っこにいる四人の奥様達が久米田さんチームに入った」
楽しんでるような感じの祐介。手足は震えている。
「お子様ランチまだぁ？美味しかったらお母さんに教えるのに」

独り言を呟いた梓。

その時、
「お待たせ致しました。お子様ランチ、ドッキドキセットでございます」
白い歯をキラリと光らせ、微笑みながらお客様を見つめたホール担当岸田。

「ドッキドキ（◎ー◎；）」
湯気だ！頭から湯気が出てます！顔が真っ赤です！胸を押さえてますよ！
「お客様、大丈夫でございますか？ご気分が悪くなったのでしたら、アチラにベッドがありますが」
何となく、キラキラしているモノが見えるような見えないような。
って言うかこのファミリーレストランの店員は、何故男ばかりなんだ？
これじゃあまるで、ホストクラブみたいだよ……。
「お兄ちゃんとよんでも良いですか（＊´・・`＊）」
男子でいうと、自分の萌えストライクゾーンみたいな感じだろうか？

その頃奥様達は。
「佐恵子負けないでよね。久米田さんに負けたら、おごらないとイケないから。今日の対決は佐恵子がやった事のない“叩いて被ってじゃんけんポン”だけど、ルールさえ分かれば簡単だから楽勝よ」
ハーゲンダッツ（バニラ味）を食べている早乙女さん。
「多恵子、ファイト！早乙女さんに負けたら、また朝昼晩とパンの耳になっちゃうから頑張って。あんなお金持ちに負けないでね！」
スーパーカップ（バニラ味）を食べている久米田さん。

「今思い出したんだけど、お姉ちゃんがファミリーレストラン晩餐会はーー店内はとてもアットホームで家族連れが多いわね。ファミリーレストランだから、家族連れが多いのは当たり前かな？って言ってたけど、これ嘘だよね（＊＿＊）」
お子様ランチを食べる翔太。お冷やのおかわりは４回目になった。
「面白いねー。またきたいなぁ」
いつの間にかデジタルビデオカメラで、奥様達を撮っている雫。
「国旗が日の丸じゃない！何処の国旗だろうコレは……緑一色だよ」と言う祐介。
気になった読者様は、地図帳を見てみよう。
「お母さんに教えよう♪」
お願いですから教えないで下さい（＜＿＞）

【今回の勝者久米田さん。始まって一分で終了した】

「ありがとうございました。またのご来店をお待ちしていますｍ（＿）ｍ」
マネージャーの沢田が、頭を下げてまたのご来店をお待ちしている。

４４時間目【糸電話】

そーいえば忘れていた。
僕は、梓部に入部したんだった……。

「ハハ。翔太くんって、忘れんぼうだね（＾－＾）」

雫ちゃん。ニコニコ笑いながら言わないでよ。

「忘れても仕方ないよね。だって、梓部は部長の気紛れで活動するんだから」

しかも、顧問がいないからひっそりとね。てか、活動って何するんだ？

「じゃっ、これからたまに梓部は金曜日に活動するみたいだからちゃんと来てね！」

ハーイ（＾Ｏ＾）／
分かりましたよ。でも、何で糸電話で話すの？

「あっ、それから大切な事を言うのーーーー」

糸切レター（。▽。）ーー！
で、新しい糸を付けるのかなぁ。……って思ってたら、雫ちゃんが僕の横に来たよ。スキップしながら。

そんで一言。
「糸電話って、糸切れるから使いにくいよね♪」

大切な事は（・・？）

♪

授業中に糸電話を使って、

「さっき大切な事を言うの忘れてたね、忘れないうちに今すぐ言うね。一度しか言わないからよ～く聞いておいて。実はーーーー」

糸切レター（。▽。）ーー！

って、真横にいるんだから小声で話してよ。何で糸電話なんだ？……って思ってたら、僕の耳元で一言。

「多分糸が安価だから、直ぐに切れるのよ」

だから大切な事は（・・？）

♪

そして、あっという間に放課後。糸電話が頭から離れなくて、授業に集中できなかった（＜＿＞）

「私と梓は先に部室に行くね。準備があるから、少し時間がかかるんだ」

糸電話ブーム到来中の雫ちゃんが、可愛い声で言う。

「準備ができたらメールするから、さっさと部室にきてよね～（ノ≧▽≦）ノ」

ハイなテンションの梓ちゃんは、何だか楽しそう。
そりゃそうか、梓部の活動があるんだからね。
でも僕は全然楽しくなれないよ！入部した時の事を思い出すしさ。
多分アレが原因で部員が少ないのかな。

「あっ、そうそう。大切な事まで言えてなかったね」
「やっぱ梓は、ヨーグルトよりプリン（＾Ｏ＾）」

ちょっと待ってよお二人さん！右の糸電話で雫ちゃん、左の糸電話で梓ちゃんが同時に喋ったら何言ってるから聞き取れないよ！
僕は歴史的に有名なあの御方みたいに、十人の声を聞き取る凄技なんて到底出来ないので……。

そう思った時。

『糸電話って今時の小学生しないよね（多分）』

糸電話ブームは過ぎ去った。

さようなら糸電話！
また会おうゼ糸電話！
お前は直ぐキレちゃう奴だったけど、多少は良いトコロはあったと思う。だから、また戻ってこい糸電話！

「……何、今回の話？」

Ａ：糸電話の話。

４５時間目【メイド喫茶】

静かな教室に、燃えよドラゴンのメロディーが鳴り響く。そろそろこの着メロにも飽きてきたし、変えようかな～（＾ε＾）

「えーっと……」

From　渡辺雫。
Ｓｕｂｊｅｃｔ　Ｒｅ：Ｒｅ２：Ｒｅ２：Ｒｅ２：Ｒｅ２：Ｒｅ２：Ｒｅ２：Ｒｅ２：Ｒｅ２
準備出来たよ～＼（＾Ｏ＾）／早くきてね！

何でこんなにも返信が多いのかなぁ。新規メール作成してよ（＊｜＊）

「さてと」

着メロを、燃えよドラゴン↓刑事コロンボ（ミステリー・ムーヴィーのテーマ）に変えたし、部室に行きますかぁ～。

――この時はまだ、何も知らなかった。久しぶりの梓部の活動がこんなにもオタな事を！

♪

日当たり最悪♪薄暗くて最悪♪の北校舎に、梓部はあった。主な活

動は、一人前のオタになる為に日夜努力する事である。
果たして日夜努力して一人前のオタになれるのか……ってか、なろうとしてなるモノじゃないと僕は思います。気付いたらでしょう。

【梓部】

そう書かれたネームプレートは、多分僕達（梓、雫、翔太）しか見ないだろう。

「って思ってる事は、部長には言えないね」

〈ガラガラ〉

ドアを開けると、そこには秋葉原で良く見る光景が広がっていた。

『お帰りなさいませ、ご主人様m（__）m』

梓部の部長と副部長は、メイドさんの格好をして頭を下げている。
でも雫ちゃん、ソレは頭を下げすぎだよ！土下座に近いと思うよ！

「あの。僕は何をすれば良いの？こーいうトコロ初めてだから、何も分からなくて……」

何故かドキドキします。
ムラムラはしませんよ。

「とりあえず、そこの椅子に座って待っててくださーい（＊^__^＊）」

部長の梓は、キッチンの方へ歩いていった。

今思ったけど、キッチンあるしお風呂あるしベッドあるし、部室に住めちゃうよね（笑）誰だったか名前忘れたけど、部室に住んでる先生がいたと思う。

「ご主人様？
“パンの中身は何でしょう―給食の定番と言えばコッペパン―セット”が完成するまで雫と遊びませんか」

ウルウルした瞳の雫ちゃんは、何故か小声で話す。
お客様に聞こえるように、ハッキリとした声で話した方が良いんだけどな。

「何して遊ぶの？」

「この“メイドさんと楽しく遊ぶ事が書かれたメニュー”から、好きなお遊びを選んで下さいませ」

何だか長いメニュー名だけど、触れないでおこう。

メイドさんと楽しく遊ぶ事が書かれたメニュー←
・燃え燃えジャンケン。
・燃え燃え王様ゲーム。
・燃え燃えトーク。
・燃え燃え写真撮影。

……燃えじゃなくて萌え。コレって、よく使われるネタだよね（――）

「全部熱そうだからやめとくよ。ゴメン」

「そうだよね。熱そうだよね。しかもこのメニュー、ファミリーレストラン晩餐会の物だし」

返さないとね（＾ー＾）

その時、

「お待たせ致しました。ご主人様がご注文致しました、“パンの中身は何でしょう一給食の定番と言えばコッペパン一セット”でゴザイマス。お熱いですので、お気を付けてお召し上がりください」

と丁寧に言う梓。

「うん。お気を付けてお召し上がるよ（v＾ー＾）」

ネーミングがかなり気になるけど、気にしてたら前に進めないから何があっても我慢しよう。

「じゃあ、梓が食べさせてあげますね♪これはサービスですので、お金はかかりませんよ（ゝω・＊）」

ウィンクをしながら、お皿から一つコッペパンを掴み、食べやすいようにちぎらないでそのまま口に押し込む。

「んあがぁん

（和訳：コレ何？ネバネバしてて、朝ご飯に食べそうな感じがして、外人があまり好まない食べ物は）」

中身は納豆だった。

「じゃぁね～次はコレを食べてください（＾o＾；」

雫ちゃんは、お皿から一つコッペパンを掴み、食べやすいようにち

ぎって僕の口に押し込む。
「んごんご
（和訳：コレ何？噛み続けると歯と顎が良くなりそうで、ビンボーさんはコレで空腹を満たしていそうで、キシリトール＋ハイドロキシアパタイトが入っていそうな口の中で噛んで味わうお菓子は）」
中身はガムだった。

「ご主人様、とても美味しそうに食べますね」
「それでは、どんどん口に押し込みます。覚悟はよろしいでしょうか？」
雫ちゃんと梓ちゃんのメイドさんのおかげで、口の中はパンの運動会やぁ～。

「多分美味しいけど、口の中のパン達が騎馬戦を始めたから、途中参加はできないよ！だから、押し込まないでね」
僕は何を言ってるんだ？

「えっ！騎馬戦してるの」
驚く雫ちゃん。
「騎馬戦じゃ、仕方ないよね……（｜＿｜）」
元気を無くした梓ちゃん。

二人は僕がパンを食べないと思って、悲しんでるのかなぁ？女の子を悲しませるわけにはイカないし、乱入も有りにしよう！

「大変だぁ（「口」；）！！
納豆パンが残り少ないよ！誰か、納豆パンを助けてやって頂けませんか？」
僕は、二人のメイドさんに向かって叫んだ。

すると二人は、

「そろそろ帰らないと、ママが心配するかも」
「じゃあ今日は解散！部長の梓は、家に帰ってブログの更新があるので」

帰る準備を始めた。

「片付けはどうするの？僕は家に帰って、洗濯物を取り込まなきゃイケないんだけどさ……」
恐る恐る聞いてみる。
二人から何かを感じたから。恐くなって。

『夜露死苦』

「えっ、ちょっとーー」

そして僕は一人取り残された。

４６時間目【ＴＳＵＤＡＹＡ－ドキがムネムネ－】

自動ドアが開いて、お客様は店内へと入る。
中年の男性、中年の女性、ハンカチで首を拭くオバサン、タオルで顔中を拭くオッサン等様々な年代の人が、ＴＳＵＤＡＹＡにはいます。

ーー様々（・・？）
四十歳ぐらいから五十歳の半ばぐらいまでの年齢のお客様バカリじゃないか！

そんな、加齢臭が臭ってきそうなＴＳＵＤＡＹＡ天上天下町店に、ランドセルを背負った小学生の男の子と女の子が手を繋ぎながらやってきました！

「雫ちゃん。掌にある蚊がさしたアトが恥ずかしいからって何で手を繋ぐの？」
「モハメド・アリ」

何だか我輩の少年時代を思い出しますなぁ～。あの頃は今よりは若かった！和歌勝った！ーーギャハハハハ俺おもしれー（＾Ｑ＾）／＾

「……会話になってないけど、そこらへんは気にしないでおくね」
「アリｔｏキリギリス」

そーいえば我輩は、猫じゃないからな！コレだけは間違っちゃイケないんだ。そこんとこしっかり覚えといてね！分かったかい？

【そこのお前！真面目にやれ（ ̄□ ̄；）！！】

ーーと言われたので、メジマにやります（わぁ～何だか業界用語っぽい♪）

一階ー少年・少女漫画ー

「翔太君何か買うの？」

相変わらずキュートな雫は、ニコリと笑った。

「うん！今日発売の“茶道先生お茶目！”を」

相変わらず英語が話せない翔太は、笑った。

「ふーん。茶道の先生お茶目なんだ？」

「最高にお茶目だよ」

週間少年マガヅン連載中！『茶道先生お茶目！』

一巻～十六巻発売中。

「今日って何日だっけ？」

「今日？ちょっと待ってね、今携帯で見るから」

翔太は雫の為に、ランドセルから携帯電話を取り出した。しかし、

「雫ちゃん今日はーー」

振り向くとソコには、雫の姿はなかった。

「アレ？雫ちゃん何処に行ったんだ……」

辺りをキョロキョロと見回す翔太、しかし雫の姿はない。
「雫ちゃん……」

その頃雫はーー。

「だからさぁ、あの男の子は彼氏とかそーいうのじゃなくってさ」
「俺はお前が心配なんだよ。変な男に騙されて、金を貢いでしまったらどうするんだ？」
雫は、背の高い今時の若者って感じがする男と二階のベンチに座っていた。
「私はまだ小学生だよ。彼も小学生ですよ」
「そんな甘い考えじゃ社会から取り残されてしまうぞ！いいか雫、外に出れば信じられるのは己だけだ」
何だか意味不明な事を言ってる、この背の高い今時の若者って感じがする奴は誰だ？
「お兄ちゃんはいつも考えすぎだよ。だから、彼女が四人もできるんだよ」
「四人じゃない！五人だ」
何人でもいーけど、背の高い（略）は雫のお兄ちゃんだったんですか。
「……私、翔太君のところに戻るから」
彼女が五人もいるお兄ちゃんに呆れた雫は、一階へと走った。

ミ（／＞＜＼）／

「グスッ…グスッ…」
ウルウル瞳からは、涙がでていました。
「し、雫ちゃん！」
突然の事で驚いた翔太は、とりあえず雫を落ち着かせようと、手を繋ぎました。
「ベンチに座ろうね」
「うん」

その様子を背の高い（略）が、見ています。そして、
「馴れ馴れしく手なんか繋ぎやがって！俺の妹になんて事するだ（ー□ー；）！！」
他のお客様なんて関係ねーよって感じで、叫んでいます。

「ーーきっと雫ちゃんは、悪者にいたずらされたんだ。だから、雫ちゃんは泣いていたんだ。僕がちゃんとまもらなかったから、雫ちゃんはヒドイ目にあったんだ」
翔太の瞳からは、涙がでています。
「翔太君……」
「女の子一人も守れないなんて、僕なんて最低だよ！最悪だよ！」
泣き叫んでいます。
「……」
雫は、自分の為にこまで思ってくれている事が嬉しくて何も言えませんでした。

「グスッ…グスッ…」
泣き崩れました。

その様子を背の高い（略）が、見ています。そして、
「俺は彼になんてヒドイ事を言ってしまったんだ！雫の事を思って泣いている彼は素晴らしいよ！何だか、ドキがムネムネするよ」
泣き崩れた。

ーー二人の恋は、知らず知らずに始まっていた。
意識をしていなくてもドキドキするこの感覚は一体何？そう思っている内に、赤い糸で結ばれるかも。

47時間目【略】

「日本人ってさ、略すの好きだよね」
唐突にそう言う少年は、Ｂｏｙ Ｍｅｅｔｓ Ｇｉｒｌの主人公である愛川翔太。
「好きなのかなぁ？」
真っ赤なランドセルを背負っているのは、Ｂｏｙ Ｍｅｅｔｓ Ｇｉｒｌのヒロインである渡辺雫。
そんな二人は、仲良く下校中なのだ。登校も一緒だから、とても仲良しなんだなぁと思いますよ。

「例えば、マクド〇ルド。これってマックって略すよね。因みに関西では、マクドって言ったりします」
「日本人は早足だし期間限定モノに弱いしせっかちだから、言葉を略しちゃうのかな」
二人は交差点にきました。車がビュンビュン走っています。横断歩道を歩く時は、左右から車が来ない事を確認しながら注意深く渉りましょう。

「それから、家庭教師。
カテキョって略したりするよね。少し言いにくい！」
「それから日本人って、時間にルーズだよね。ナポリの人は時間なんて全然気にしないらしいよ」
話が噛み合っていない二人は、右・左・右・左・上・下・と首を動かした後、手を挙げまくって横断歩道を横断する。

「って言う事でさ、略して話さない？」
「うん！そうしよう」

【ここから二人は略して話します。何を言ってるか分からないと思いますが、頑張って二人が何を話しているのか当ててください！】

「そう：翔太」
「だよ：雫」
少年は少女の顔を見て、無邪気に笑った。

……何言ってるのか、全くわからないんだけど。

「分からないの？」
「今頑張ってるのかな」

……頑張って考えたんですが、分かりませんm（__）m

「マジですか？」
「略さずに話すとこうよ」

【皆は二人が何を話しているのか分かったかな？

答え合わせをしてみよう】

「そーいえば最近、お兄ちゃんが泣きながら帰ってきて大変だった！僕がどうしたの？って言ったら、お兄ちゃんは“財布を落とした”って元気の無い声で言ったんだ。僕はどうしたら良いんだろう？」
「だれでも失敗はあるよね！完璧な人間なんてこの世にいないんだから、財布を落とすぐらいで泣いてたらイケないよ」
少年は少女の顔を見て、無邪気に笑った。

【皆は勿論正解してたよね！長い言葉を喋るのは面倒だから、皆も略そうね☆】

「お腹空いたしソコのコンビニで何か買わない？」
「駄目よ翔太君！間食は太る原因の一つなんだから」

……お二人さん。ソレを略すとどうなるの？

「でさ：翔太」
「なに：雫」

……略すのも程々に。

48時間目【居酒屋武勇伝／1】

ここは居酒屋［武勇伝］

天上天下駅から徒歩5分ぐらいの、お洒落でアダルトな雰囲気がするお店。

居酒屋というか、バーって言う方がしっくりくるが、ソコらへんは無視しよう。

そんな居酒屋武勇伝で、一人淋しくお酒を飲んでいる女性がいた。

「おぉロミオ！貴男はどうして、マリオじゃなくてロミオなのー、（´Д｀」

彼女は既に酔っ払っていて、男を引き付けないオーラを店中に放っていた。

「ママァ～。ホワイトタイガースマイルおかわりー」

そう言うと、常連男性客と話していたママが酔っ払いの隣に座った。

「幾ら私のオリジナルカクテルが美味しいからって、飲み過ぎよ」

「だってだってなんだもん（「∠｀-´）ノ」

「合コンでまた私だけ一人余ってお前は帰れよ邪魔なんだよっていう幻聴が聞こえてきたからその場にいるのが嫌になって一人淋しく店から出たのね？」

「そうなの……。さすがママ」

「結香ちゃんの事は何でも分かっちゃうわよ♪」

結香？何だ、今回は松下先生が主役のお話ですか。

「ヴゥ…地の文まで私を罵る。皆私をイジメル」

「そんな考えをしちゃ駄目！何事も前向きにならなきゃイケないわよ（＾―＾）」

「そんな事言われてもしょうがないよ……」

松下先生は泣きだしてしまい、その姿はいつもの松下先生と比べたらとても情けない。

ママはオリジナルカクテル

「ビューティフルライフ」

を無理矢理松下先生に飲ませ、眠らせようしている。

「今日も私のおごりで構わないから、さっさと寝ましょうね～」

「（＊―＊）」

ママは松下先生が他の客と喧嘩でもしてしまったら後々面倒な事になると思い、必死でオリジナルカクテルを無理矢理飲ませる。

そんな二人のすぐ側でマイクを握る一人の女性客。

彼女も悲しい出来事があり、一人淋しくやけ酒を飲んでいたのだ。

そんな彼女が選んだ一曲がコレだ！

【涙がでちゃう】

作詞・作曲　ママ

私は涙を流した

体中の水分が無くなるまで

私は涙を流した
アイツの事を恨みながら

（♪ジャッジャッジャッ）

私は涙を拭った
馬鹿馬鹿しくなったから

私は涙を拭った
アイツに復讐する為に

（♪ジャージャージャン）

包丁持って外に飛び出し駆け出す私
ポリスに見つかりあっさり捕まり銃刀法違反
私は私はまた泣いた
勝手に涙がでちゃうから

（♪ジャンジャジャ～ン）

私は涙を流した
玉ねぎを切っていたから

私は涙を流した

彼が動揺すると思って
（♪ジャッジャッジャッ）

私は涙を拭った
玉ねぎを切り終えたから

私は涙を拭った
彼が私の事心配するから

（♪ジャージャージャン）

貴方の事はコレっぽっちも好きじゃないけれど
私に何でも買ってくれるから付き合ってるの
私は私はまた泣いた
勝手に涙がでちゃうから

（♪ジャージャージャ～）

包丁持って外に飛び出し駆け出す私
ポリスに見つかりあっさり捕まり銃刀法違反
私は私はまた泣いた
勝手に涙がでちゃうから

貴方の事はコレっぽっちもに好きじゃないけれど
私に何でも買ってくれるから付き合ってるの

私は私はまた泣いた
勝手に涙がでちゃうから

（♪ジャーーーーーーン）

「ウルセー！！」
松下先生は女性客にパンチ（つ、∀，）＝つ）、д゜）
「結香ちゃんやめて！お客さんが減っちゃうから！」
ママは泣きそうだ。

ーー居酒屋［武勇伝］
常連客には要注意（^・ ^）b

４９時間目【しりとり】

昨日雫ちゃんがこんな事を笑顔で言っていた……。

「明日はしりとり日和なのよ（〃∇〃）」

何でそんなに嬉しそうなんだろう？って思ったけど、遠くから聞こえてくるクラシックな音が気になったから、それ何ってツッコメなかったよん。

そして今――、

「翔太くんはさ、今日の部活楽しみ？」
「未知なる世界にまだ馴染めません。アレは、小学生には到底理解できない代物です。
でも、何で雫ちゃんは平気なの？普通にスゴい」
「嫌じゃないよ。
日本の文化だし（＾―＾）」
「子々孫々に伝えなくちゃイケないかな？」

しりとりで話しています。

あっそうそう。
皆々様に“しりとり”の説明をしますねーｏ（＾－＾）ｏ

［しりとり］
前の人の言った言葉の最後の一音を、次の言葉の始めの音にして、
順々に言っていく遊び。

だそうです。
改めて再確認したので、続きをどうぞ！

♪
場所は教室、午前中の授業がやっとこさ終わって皆楽しみの給食☆
因みに本日の気になるメニューは、
〈ドキドキおにぎり〉。

「何？ドキドキって」
「テメェーそんな簡単な事すら知らねーのか！
ドキドキっていうのは、動悸がする様子だ」
「だ、大丈夫かよこのドキドキおにぎり（＜＿＞）
食ったら息切れとかめまいとかしないよなぁ？」

……僕達だけでしりとりやってるかと思った。
てか、会話になってるかは微妙だよね。

「翔太くん！間抜けな顔はそれぐらいにして、早くドキドキおにぎり取りに行こうよぅ」
「うん。そうだね」
「寝転んでる梓のおにぎりと、隅っこでちっさくなってる徳川君のおにぎり忘れちゃ駄目だよー」
「余裕だよ。
僕のおにぎりと雫ちゃんのおにぎりと梓ちゃんのおにぎりと祐介のおにぎりを、一人でそこまで落とさずに運ぶぐらい（；　。Д。）」

僕は雑用係だから。
６時間目でそう決まったんだ！ちょっと僕も忘れかけてたけど。

「一個、二個、三個――。それからこれとあれとそれと、最後のはオマケ」

よし！任務完了。
あとはゆっくり雫ちゃん達の所まで歩けば――

（≧Д≦＊）

へっ

（≧д≦＊）

へっっ

（結局こーなるんかい。
ヤバい！ヤバいよ！）

（≧∧≦＊）

我慢我慢

（ようっし。
今くしゃみなんてしたら、おにぎり床にべちょり）

（≧д≦＊）

へっ……

（≧д≦＊）

へっっ……

（理不尽だ。なんて理不尽だ。こんなオチ嫌なのに）

※※（≧д≦＊）

へっくちゅん

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6837a/

Boy Meets Girl

2010年10月10日05時48分発行